

書評

1986.4 No.77



書評編集委員会

書評 77号 (4月) 目 次

読書案内 これから 何を 読むの？	三種類の読書の型	千藤 洋三	4
	〈筑豊〉— 近代日本の栄光と悲惨	玉田 勝郎	8
	インチキに騙されないために 錯覚に気づくために	松岡 保	11
	「時代」を透視するために	陶山 計介	13
	読書日記より	三谷 真	15
	A君の将来	隈元 昭	17
	三橋修と「飛べない身体」	池田 進	19
投 稿	内藤湖南と「北朝鮮ルート」論	西 重信	22
連 載	聞き書き・部落に生きる人たち ^⑩ 解放研究生徒との話し合いを	田宮 武	38
	日本中国ことばの来往 その23	芝田 稔	62
	研究余滴・ヴェルレーヌ 3 華やかな仮装の陰で	山村 嘉己	70
	羅 針 盤		1
	お知らせ		80
	編集後記		80



また新たな仲間を迎える季節がやってきた。桜が咲き誇る関大のキャンパスを戸惑いがちに歩き回る新入生の姿を見ていると、自分が数年前同じように大学生として初めての四月を迎えた頃のことを思い返し、今の彼等ほどのような思いを大学や学生生活に馳せているのかと考えてしまう。多くの新入生は恐らくはこの目のために用意したであろう背広や着物を身に着け、手には先輩から持ちきれないほどのビラを受けとり、そして胸の内では新たな生活への期待と不安が渦巻いているのではないだろうか。

こんなふうを書いてきて、ふと何やらうさん臭さを感じてしまった。世の中にはとかく新入生〓初々しく、潑刺としているというイメージがつきまとうが、実際の彼等の胸の内はずっと醒めているのではないだろうか？

それは「少年よ大志を抱け」式にしゃにむに行動するのではなく、もっと現実的な感覚で物事を捉え、彼等なりの設計図を組み実行しようとしているのではないかということだ。学生の愛読書からサルトルやカミュといった哲学書が姿を消しファッションや車、旅行等に関するHOW TOものがそれにとって替っていると行われて久しい。生き方を問い直したり政治談議をしたりということとはナウくないというよりタブーに近いのだ。関心は、

もつばら個人的な或いはその周辺のことに集中する。

しかしこういった極めて近視眼的な学生生活のスタイルも実は非政治性、没主体性を標榜することによって政治的な立場とする、非常に屈折した政治表現ではないだろうか？ 少なくとも今の社会や政治を一定の歴史観

(明治と比べてどうか)や世界情勢(例えばアメリカや韓国と比べて日本はどうか)の中で相対化し評価すること、政治や社会と自分との距離感を測定することは、人によって程度の差こそあれ誰でも行なっていることではないだろうか？ 前者については概ね合格点をつけている人が多いのではないだろうか？ ECやアメリカが貿易赤字に喘いでいる中で、日本は輸出超過が言われ、世界で最も富が集中している国だとさえ言われている。

明治の資本主義形成期に必然的に起った「女工哀史」のような低賃金・長時間労働による搾取も昔話にされ、ある程度の生活の豊かさは保証されている。そして後者については極めて距離があると考えている人が多いのではないだろうか？ 投票で世の中が変わると思っっている人は少ないだろうし、政治とは所詮一部の人間に独占されているものであり、自分一人でどうなるものでもない。それゆえ不満や憤りを感じたとしても、次の瞬間にやってくる無力感に打ち消されてしまうのではないだろうか？

以上の判断に基づき、大多数の人が非政治的なライフスタイルを選択し、身近かな、周辺の物事に興味を集中させているのではないだろうか？ もしこの問題の立て方が正しければ、これは極めて不自由な、窮屈な空間に自らを閉じ込めてしまっていると言えないだろうか？ この息苦しさをまぎらわすことが、車や恋人やスキーやテニスに向っているとすれば、清算にしか過ぎないだろう。

こういう話になると、60年安保時の運動や全共闘運動が何を残したのかといった類いの話になり、「結局、何も変らなかつた」という結論だけが引き出されてしまったりする。しかし、それで非政治的な自分の在り方に納得してしまったとしても、結局戻る先はスキーかテニスかサーフィンか位しか残されていないだろう。しかもこれすら四年間という限定つきのものであり、その前後には受験戦争、出世競争と不断に人と人とを分け隔てるシステムが存在しているのだ。いや、学生生活や大学自体にもその機能は貫徹しているのだ。

何かサーフィンをとるのか政治を取るのかといった話になつてしまふそうだが、要は我々が何故今の日本を、「ましな国」だと思ひ、「豊かな国」だと思つている(と私たちの話だが)の問題だろう。例えば劇的なマルコスからアキノへの政権交替により日本でもマスコミが大々的



に報道したフィリピン情勢。アメリカの介入のみがクロ
ーズアップされているが、日本がフィリピンの貧しさと
無関係なのだろうか？ マルコスと日本の商社との癒着
は有名な話である。彼が大統領に就任するや三井、三菱、
住友、丸紅、ニチメンの五商社は「大統領行政指導」に
よって一斉にマニラ支店開設を認められたそうである。日本
は、フィリピンにとって最大の貿易取引先の一つだぞ
うだが、ネグロス島の飢餓や、東洋最大のスラムと言わ
れるゴミの山（スモーク・マウンテン）に人が住んでい
るマニラのトンド地区と、「豊かな」日本との対比は極め
て一方通行な富の流れを物語っていると云えないだろ
うか？

実際、フィリピンの人々は、アメリカや日本の経済侵
略が自国の貧困を招いていると考えている。もし我々の
生活が彼等の犠牲の上に成り立っているとすれば、サー
フィンやテニスをすることが、我々の思っている以上に
大きな意味をはらんでいると云えるだろう。そして、距
離があるからと政治に口出ししないと云ったことは体の
良い言い訳に過ぎない。

読書案内

これから何を読むの？

新入生の皆さんは、大学に入られて、これから法学、経済学など様々な専門分野の研究に入られるわけですが、そういった専門分野の研究に入るための基本的な知識は圧倒的に少ない。現在皆さんが持つておられる「知識」というものは、受験に必要なかどうかという今となくては全く無意味とも思える価値判断により選択された、ほとんど別の用途に用いることのできないような「知識」ではないと思います。これから必要とされることは、過去に蓄わえたその何の使い物にもならない「知識」を、専門分野の研究を進めていく上で必要なものと言え、これからの人生を生きていく上で必要となってくる知識に変えていくことではないでしょうか。では、具体的に何を読めばいいのでしょうか。以下、各分野の先生方に読書案内を書いていただきました。無から有を作り出す作業の第一歩として、とりあえずこの案内から出発されてはいかがでしょうか。そして本当に有意義な大学生活を送って下さい。

三種類の読書の型

千藤洋三

新入生諸君、御入学おめでとうございます。諸君は、大学という極めて自由な世界に入られました。ありあまる（と勘違いされているのですが）時間をどう使おうかときっと戸惑われるのではないのでしょうか。これまでの高校時代とは異なり、日々の生活スケジュールを含めて全て自分で決めなければなりませんし、決めるべきでしょう。本来、良い意味での自由人とはそういうものなのです。何をどう選択すればいいのか、不安・不満がつのります。むしろ、他者から規制され、規則通りに生きていくことの方が楽かも分かりません。しかし、大学時代こそ真の人間性をあくことなく追求しうる人生における最良の時期といえましょう。そうした境遇に身をおかれるに際して、学生としての最も基本的な作業の一つである読書に関する私のささやかな経験や感想を紹介することによって、諸君に多少なりともお役にたてればと願って

います。

読書には、大きく分けて次の三種類の型があるように思われます。

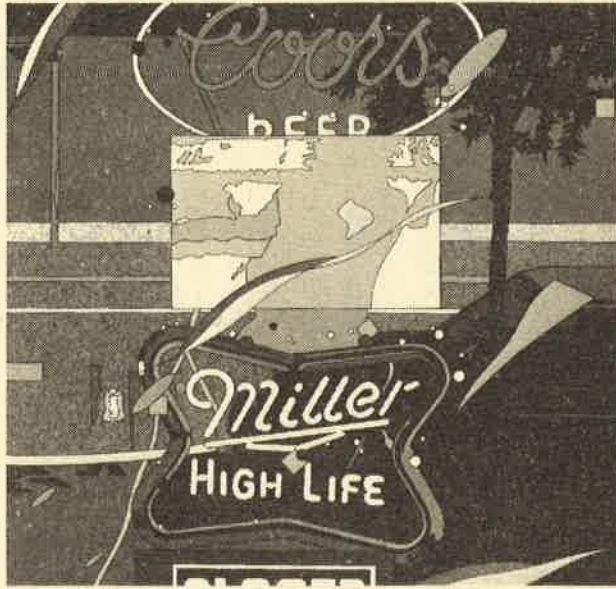
一、愉しみ型

二、自己啓発型

三、強制型

実は今、私は専門ゼミ学生(三回生)十八名と共に、志賀高原にきています。宿舎にある喫茶室の窓から、冬とはとても想像できないほど強い陽光にまばゆく輝いている白銀の世界をながめながら、ふと何故スキーをしに来たのだろうか、と思いました。スキーが楽しいから、あるいは未知なることへのあこがれから、さらにはゼミ仲間が行こうといい、先生もゼミ旅行は休まないようにと促していたから、というのが学生諸君にとつての主な理由でしょう。少し乱暴な議論ですが、読書にもこのことがあてはまるのではないでしょうか。まず、愉しいから本を読む。次に自分を高めるためにやや苦痛であるけれども読む。それを持続させるためには好奇心・向上心がなければなりません。最後に、嫌々強制されて読む。専門の教科書や語学書などを読まされるのはこの類に入るのでしよう。もっとも、これらの型が峻別されている訳ではなく、相互に関連していることはいうまでもあり

ません。たとえば試験のため強制されて読むとはいえず、そこには知識を得ることへの知的充足感があるでしょう。ところで、新入生諸君のほとんどは、これまで強制型の読書しかしてこなかったのではないのでしょうか。その結果、たとえば日本史や世界史の教科書を読まされ、受験知識としては、石田梅岩とかモリエールという人達の名は知っていても、実際にその書かれたものに触れた人は極めて少数と思われれます。これに比して、マンガ本は愉しみ型のカテゴリーに入れれば(読書人と称する人の多くは、これに反対でしょう)、週刊少年ジャンプが常時四百万部売れている現在、諸君の中のだれしもが読書の愉しみをもっているといえましょう。読書は、本質的には愉しくあるべきだ、というのが私の持論です。だから、読書とは「教養のために書物を読むことであり、寝ころがって読んだり、雑誌・週刊誌を読むことは、本来の読書には含まれない」(『新明解国語辞典』より)と、厳しい戒律に服する求道者に課するような読書だけが正統な読書だとは思いません。週刊誌だってマンガだって、これを読む(見る?)ことも読書に入るのではないのでしょうか。(かつて湯川秀樹氏はマンガ本を手にとられ、これのどこがおもしろいのかまったく分からない、と述べられたそうである。しかし、私はマンガ本を読むことがそ



れほど反読書行為とは思いません。おもしろいか否かは、その人の感性に訴えるものがあるか否かで、極論すれば、「好み」の問題である。戦後の食糧難時代に育ったある自然科学者が、手塚治虫氏にノーベル賞を、といったのはけだし一つの卓見かもしれません。現在の日本のハイテ

クノロジを支えているかなりの数の研究者や技術者を含めて、かつて多くの少年少女が、鉄腕アトムによってどれほど夢を与えられ、また未来への希望をもったことか……。ただ、どんな本にも時間をつぶすに値しないものがあるように、マンガ本にも、あるいはマンガ本なればこそ時間の無駄遣いといえるものが多いことは否定できません。

以上の三型のうち、新入生諸君に特に望むのは、自己啓発型と強制型の読書を四年間のうち可能な限り是非進めて頂きたいのです。大学を出ると、自由な時間が中々持てなくなること、さらにそれ以上に自分を向上させようとする意欲が次第になえていき、あえて難しい本にチャレンジしなくなるからです。断定的にいえば、卒業時における諸君の読書能力・意欲は、それ以後上昇することとは期待薄です。ですから、社会に出るまでに、苦しいでしょうが、克己心をもって読書に取り組み、自己啓発型・強制型の読書を愉しみ型の読書領域にまで引き上げて下さい（古今東西の名著をグループで輪読するなどの方法をとれば苦痛は少ないかも）。マルクスの『資本論』、カントの『純粋理性批判』、ラードブルフの著作集、等々、数多くの名著を、私自身ほとんど読んでこなかっただけに（ツン読は結構やっているのですが）、悔悟の気持ち

込めて、諸君に是非にと望んでいます。

以下、私がごく最近讀んだもののうちで諸君にも興味がもたれるもの、したがって「愉しみ型」に属するものからということになります、挙げておきましょう。

(読書の悦びの一つは、図書館なり書店で気に入った本を自分で見つけることにあると思います。他人にとつて良かつた本が、自分にとつて必ずしも良いとは限りません。ここで紹介するのはほんのささやかな参考のためです)

『外国人との上手なつきあい方』関山貞三著・実業之日本社。ペテランガイドの豊富な経験がひれきされていきます。銀座のどまんなかで財布を失つたとわめき叫んだユダヤ人のお婆さんが、実はツアーの人達とぐるになつて保険金詐欺を狙つた者であるとか、陽気なラテン系の人達にバスの出発時刻を守らせるには、がなりたてるよりも相手に自由を与えること、例えば「どうぞごゆっくり楽しんで下さい。なお、このバスは定刻どおり出発します。もし遅ければ、タクシーを使つて、どこそこまで来て下さい。但し、タクシー代はこれだけ要りますよ」と。各国の国民性がよくわかるとともに、日本の風習・風俗や日本人の物の考え方を知らうえにも、役に立つといえよう。

『トットちゃんのカルチャーショック』黒柳徹子著・小

学館。著者が初めてアメリカに行った時に、飛行機のかなかで、金髪のスチュワーデスさんを「ちよつと」と呼びとめたのに、彼女はニッコリ笑つて「バイバイ」と愛想よく手を振つて行つてしまふ。日本人のする「おいで、おいで」の手のかたが、アメリカでは「バイバイ」にあたることを知り驚く。その後も、数多くのショックを受けた著者が、それぞれの道の専門家と対談したこの本は、世界の広さ・文化の違いを教えてくれる。

『縮み』志向の日本人』李御寧・講談社文庫。私達日本人の氣付かなかつた発想法を見事に明らかにしてくれた好著であるとともに東洋を忘れ、あるいは蔑視の氣持もなきにしないはずの私達への警世の書でもある。こうした本が手短かに読めることに、むしろ感謝しなければならぬであろう。三週間ほど前に我が家に泊まつていたフランス人ジョナタン君の持つていたガイドブック『Le Japon』に奈良の大仏が韓国人(Coese)だれそれによつて作られた、と載つてゐるのを知り、驚きをおぼえた。日本の教科書には恐らく記載されていないであろうが、その方が事実であろう。外国の本を外国語で学びとることもきわめて重要であると改めて知つたのである。

『われら動物みな兄弟』畑正憲・角川文庫。動物好きな私は、時たまこういう類の本を讀むのが好きです。『雌雄



の鑑別法 亀頭を押すとペニスが出ることについて」の研究テーマで報告をした学者の話など、さすがはムツゴロウさんである。文章も上手く、内容も素晴らしい。

『嵐の時』 大江志乃夫・筑摩書房。日露戦争後の日本陸軍内部に題材を求めた歴史小説。二〇三高地攻略の英雄（？）猪熊中尉と彼に反逆し脱営した兵卒達を中心に、当時の社会状況を明らかにし、大逆事件の本質に迫ろうとするものである。読む者をひきつけずにはおかない素晴らしい力作といえよう。

『海は甦える・全五巻』 江藤淳・文芸春秋。日本海軍の創始者山本権兵衛を中心とした長編ドラマ。私自身まだ

読みきっていないが、二・二六事件五十周年の今年、軍部がどういう経緯をたどって日本を壊滅させてしまったのか、を明らかにすることは興味の抱かれるところである（勿論、責めは政治家や財閥も負うべきであることはいうまでもないが、朝日新聞のロベール・ギラン氏が警告しているように、財界が他国への経済侵略をストップすることができず、結局かつての軍部と同様に今日の日本を崩壊させる恐れの出ている現在、歴史から教訓を学びとることが今ほど急務である時はないであろう）。

（せんとう ようぞう・法学部教員）

〈筑豊〉——近代日本の

栄光と悲慘

玉田勝郎

石炭産業の地であった〈筑豊〉の生と死の記録を写真集に編むにあたって、上野英信は「そのかぎりなく深い地底の闇をふまえざりて、日本資本主義発達史を展望することは到底できまい。〈筑豊〉、それはながらく日本資本主義のはらわたであった。近代日本の栄光と悲慘のす

べてが、その重い暗黒と沈黙の臟腑につつまれており、かみさびた葦むらの一管一管まで、ここではいけにえの血をにじませている。」と記した。（『写真万葉録・筑豊』
1 「人間の山」）

周知のごとく、近代日本の巨大な歯車を回転させた動力源たる石炭産業は、想像を絶するばかりのおびただしい坑夫の死体の上に築かれ、その血を吸って成長をとげた。そして、「黒ダイヤ」と呼ばれた石炭が、一九五〇年代末、高度経済成長を支えた石油にとつてかわられるとともに、この国の人々は、坑夫たちの〈生〉と〈死〉をも地底の闇の彼方に葬り去ったのである。

明治四十年豊国炭鉱ガス爆発―死者二六五、同四十二年貝島大之浦炭鉱ガス爆発―死者二五九、同四十四年住友忠隈炭鉱ガス爆発―死者七三、大正二年日鉄二瀬炭鉱ガス爆発―死者一〇一、同三年金田炭鉱ガス爆発―死者六三、同年三菱方城炭鉱ガス爆発―死者六五、同六年貝島大之浦炭鉱ガス焼死―死者三六九、同七年中鶴炭鉱ガス爆発―死者三〇、……昭和三十八年十一月九日三井三池炭鉱炭塵爆発―死者四五八、昭和四十年六月一日三井山野炭鉱ガス爆発―死者二三七、昭和五十九年一月十八日三井三池有明炭鉱坑内火災―死者八三。……

一世紀にわたつてくり返されてきた、これら（年表の一部）の坑内事故の背後には、むろん大小無数のガス爆発、岩塵爆発、岩壁崩壊、落盤、出水、等々の「非常」がつみ重なっている。その死者を数えあげることとはもはや不可能であるが、それにもまして困難な作業は、日常不断死と隣りあわせの地底で、坑夫たちがいかなる〈生〉を生き、〈死〉をとげたのか、を知ることであるだろう。

“去るも地獄、残るも地獄”といわれたこの世の生き地獄を、坑夫たちはいかに生きたか、生きねばならなかったか―上野英信は、氣力をもって視ぬがぎりなほどのこともみえてこぬその地にあつて、彼らの生きざま、生存感覚、情念のありようを、まさに地底の闇をひき裂くようにして、「地上」のわれわれに語りつたえてくれた。

筑豊という、とほうもない人間破壊・抑圧・荒廢のルツボのありさまを、彼は、鍛えぬいた眼と達意の文章によつて容赦なく、執ように告知しつづけた。彼は、〈死者〉たちの深い遺恨と沈黙の底部にわだかまるものから眼をそらさなかつた。それゆえ、また、炭坑労働者の、「追われゆく坑夫たち」の、したたかな生活意識と骨太い哄笑が、センチメンタリズムとは無縁の位相でつかみとられたのである。

〈死者たちのたましいが出口のない坑道をむなしくさまよっているとき、やはり同じように地上をさまよい歩いている妻や子は多かつた。夫や父を奪いとられた者たちにとつても、炭鉱はけつして安住の地ではなかつた。野辺の送りをすまして涙もまだ乾かないうちから、彼らは納屋を追いたてられる。かえるべき故郷もなく、あすの米代もない。なんとしてもヤマにふみとどまるほかにみちはない。そんなわけで、初七日がすむかすまぬうちに、おなじ炭鉱に働く男と再婚する女たちは、いまも昔もめずらしくない。……

——この女もそんな不幸なヤマの女の一人であつた。夫が奪われ、夫が変わるたびに、子どもが生まれた。あたかも死の申し子のようにそれぞれ種がちがう子をかかえて、彼女はまたしても新しい夫のもとに移つてゆくことになつた。そのはじめの晩、かたちばかりのまじしいお祝いの食事のときのこと。子どもの一人が不平そうに箸を口にくわえて、母親の着物の袖をひっぱつていった。／「かあちゃん、今度のちゃんのこと、いつちよも御馳走のなかね」／すると母親はその子にいつてきかせた。／「しんぼうしてたべね。このつぎにまた新しいちゃんのとこへいくときには、どつきり御馳走のたべらるとこへ連れていつてやるけん」

／「うん」／子どもはすなおにうなずいて、黙々とたべはじめたということである。〉（「地の底の笑い話」、『上野英信集』1所収）

上野英信の作品は、坑夫の悲惨の書ではない。世の多くの似非ヒューマニズムとは、彼の表現は次元を異にしている。彼は「子らよ、孫たちよ」と呼びかけ、つぎのようになべているのである。「われわれはこれを、呪われた世紀の血痕としてではなく、暗黒を焼きほろぼすための火種として、あらたな人間の世紀をきりひらく者たちに贈りたい」と。

- 上野英信集 第1期全5巻（径書房）
- 写真万葉録・筑豊 全10巻（葦書房）
- 山本作兵衛 『筑豊炭坑絵巻』 『王国と闇』（葦書房）

（たまた かつろう・文学部教員）

インチキに騙されなかったために 錯覚に気づくために

松岡 保

豊田商事のインチキ商法問題は、まだ記憶に生々しい筈である。考えてみると、十年ほど前の「ねずみ講」くらい、この種のインチキ商法は、結構手を替え品を替えてつづいており、大学近辺でも、その種に近いのではないかと思われる「アンケート商法」は、「宗教的？」なものをも含めて、新入生あたりを狙っているのを、折々みかける。

そうしたインチキ商法に騙されなかったためにはとなると、経済学をよく勉強して、経済の仕組み、社会の仕組みをよく認識すること、世の中には頭の良い悪い奴がいるから気をつけることぐらいいしか言えないが、実は世の中、それ以外でも結構インチキは多いし、私たちの錯覚につけこんで、とんでもないことがまかり通っていることはたくさんありそうだ。

それゆえ、大学に入学して、すこしまじめに、なにか

を読もうと考えている新入生諸君に向けての読書案内をとのテーマに依って、標記の題をかかげ、比較的最近の記憶に残った関係書籍三冊をすすめることにした。

考えてみると、大学は、真理を批判的に明らかにするところ、真理を探索するところとされている。そのかぎり、インチキを見破り、本物とにせもの、真実と錯覚を明らかにするのは、これ大学の使命の一つであり、共々そうしたことに心がけ、つとめるべきであらうし、インチキに騙されず、錯覚に気づく人間として卒業生を送り出せたら、目的達成とも相成ろう。

前置きが長すぎたが、近年、さすが本物（の研究者）は恐ろしい、それにたいして、多少ウサン臭く思いながら、結構まんまとやられていたかと気づかせてくれた本は……

浅見定雄『にせユダヤ人と日本人』朝日新聞社、一九八三年、であった。

今は有名な山本七平氏が、一躍世間に知られ、テレビ、雑誌ではもちろん、政府のなにやら委員会でも活躍するきっかけとなったのは、『日本人とユダヤ人』（一九七〇年、現在は角川文庫所収）の出版によつてであるが、この「出世作（訳？）」が如何にインチキなもので、読者——私の無知につけこんだものであったか、そして依然と

して山本氏はそうであるかを、朝見氏の本書は肝に銘じさせてくれる。

いかに、どこがインチキか？ 詳しくは読んでいただきたい。なにしろ、楽しいことは一杯ある。英語から訳されたかのような形をしていた「ユダヤ人と日本人」は、英訳出版のさいは、断りなしに章が省かれ、文意は変えられる（アメリカ人、ユダヤ人が読めば、即座に「博識」がばれるから）。山本七平式英文和（誤）訳法なる形で、勝手気まま、意味不明の文章ができ上るところは、大学入試に出したいくらい、面白い。

それにつけても、あの種の本と著者がまかり通るのは、我々日本人におけるキリスト教、ユダヤ教についての常識の低さにも由来するとすれば、国際化はほど遠いし、国際化にかこつけて、「えせ」国際通がまかり通る恐れは、他にもまだまだあるようである。本来、求められるのは、さすがといたい朝見定雄氏のような専門家、その生かじりでない知識であろうが、朝見氏は逆に、広島大学の講演会で「原理研」の学生に邪魔されたとか報道された。インチキ派にとっては、それに値いする恐ろしい本である。問題は変るが、やられたと錯覚を気づかされ、大いに啓発された種類のひとつとして、

田中克彦「ことばと国家」岩波新書、一九八一年も、

ぜひ学生諸君にすすめたい。日本を単一民族（「言語」国家と思いきんでいる我々の陥りやすい「母語」と「母国語」の混同問題もさることながら、ドーテの「最後の授業」の話には、正直、参った思いである。言われてみればその通りなのに、「国語愛」自分たちの言語への愛着」の話とばかり思いこんでいた私は、「アルザスに朝鮮を、フランスに日本を入れかえれば」との指摘に、恥じ入った。「最後の授業」は、言語的支配の独善をさらけ出した、文学などとは関係のない、植民者の政治的煽情の一篇でしかない」はずなのに、まんまと長年、反対を思いこまされてきたのだから、「文学」は恐ろしいともいえるだろう。これまた、差別と偏見あたりとからんで、同種のものにこと欠かないと自戒した。

最後は、本田勝一・武田文男編「植村直己の冒険を考える」朝日新聞社、一九八四年。

死者をかれこれ言うことは、あまり好きではないし、まして私にとって全く無縁な探険や冒険の世界ではあるが、莫然といだいていた疑問を明らかにし、現代社会のコマーシヤリズムの恐ろしさを、本書は明らかにしてくれた。校長先生が「国民的英雄」として児童に話された例まであったとは、本書ではじめて知ったのであるが、考えてみれば我々も、随分そうだった（例は省略）。

それにつけても、我々としてインチキ。模写・模造ならまだしも、それこそインチキな講義をする身ゆえ、願わくばインチキ講義に騙されず、インチキを見破る目と力をつけてと望みたいが、そのためには、やはり一つは本物の本を讀むことではなからうか。それへのきつかけと、以上がなれば幸いである。(まつおか たもつ・経済学部教員)

「時代」を透視するために

陶山 計介

「趣味」としての読書の比重が極度に少なくなつてから久しい。履歴書の「趣味欄」に音楽鑑賞やスポーツなどと並べて読書と書くことをためらうようになったのも研究者という職を志し始めた頃である。教養を身につける社会常識を養うための読書の必要は自覚しているもの、いざ自由な時間ができても専門とする経済・経営や流通関係の本、新聞、雑誌に目が移つてしまふ。精神的なゆとりをなさか、多分に性格的なものが作用しているのかもしれない。

学生諸君が読書する動機をみると、大きく二つが考えられる。一つは、「強制された」読書というか講義やゼミで教科書、参考書として使われていたり、試験対策や単位を取るためのいわば直接の「実利」をとまう読書がある。もう一つは、「自由で自覚的な」読書で、知的好奇心を満たしたり、「趣味」や教養のために讀むものである。ただなんとなく好きだから讀むということも十分に動機となりえよう。私自身、大学とくに一、二回生の頃には、受験で抑圧されていた高校時代の借金を取り返そうとしたかのように新書や文庫の類を讀みあさつた記憶がある。試験期には教科書を讀まされた。

これらの動機のどれが好ましいとか、これは不純だとか決めつけるものではない。私の場合でも当時讀んだ本のうちどれがどう役立つかを識別することはむずかしい。ただふりかえてみて人生ないし進路上的の転回点の一つを準備したのは系統的にまとまつて讀んだ社会科学や中国に関係した本であつたように思われる。その多くは専門書ではあるが、先の分類でいえば後者の動機からであつた。しかし、学生諸君の月平均の生計支出のうち「図書・教養費」がたかだか一〇％台の比率である現状では、動機はどうあれ、とにかく本と接する機会を増やすことが先決問題といわざるをえない。

読書することを決意してから迷うのは、どんな本を選び、どのように読むかということであろう。そしてそれは読書の意味を何に求めるのか、大学における学問なり理論のあり方はいかにあるべきかという厄介な問題と密接に関連している。最近読む機会のあつた堤清二著『変革の透視図——脱産業論(改訂新版)』(トレヴィル)は、この点で一つの示唆を与えてくれる。周知のように堤氏は、義明氏とともに西武流通王国の総帥で、現在は西武セゾングループ代表の要職にある。同時に、詩人・作家としても活躍している異色の「革新的経営者」の一人である。ビジネスの第一線にある著者が、流通産業の全体像を浮かびあがらせながらその本質と課題を明らかにしようとしたのが同書である。

そのなかで堤氏は、理論・学問と実際の行動との「ギャップ」に言及する。

「わが国の場合、特徴的なのは、現実の政策科学を考えていくさい、現実問題の処理と理論的發展とが一致していないことである。理論は学生時代に学んだところから一歩も前進せずに、実際の経験だけがくりかえされていく」
また、大学という「世俗から隔絶した権威のなかで学んだ学生たちは、社会へでたとたん非常に大きなギャップに遭遇する」とものべている。

科学の政策的機能や理論の実践的性格についてはウェーバーのいう科学の「価値自由」性をめぐる「価値判断論争」などさまざまな議論がみられ、それを定式化することは容易ではない。とはいえ、少なくとも、「どんな人間でも歴史的・社会的な制約から離れては存在しえない」こと、理論が対象のもつ客観的な諸特性とともに認識主体の意図をも反映したものにほかならないことを考えれば、理論と実際の経済・社会諸活動を分離させることは適当ではない。ビジネスサイドから科学の「社会的有効性」を問うた堤氏のこの指摘をまつまでもなく、大学人として絶えず念頭におかねばならない根本問題の一つであるといえよう。

一方、今日においてなみられる大学と「世俗」との「ギャップ」についていうと、「世俗」からの単なる「立遅れ」やそのなかに権威を見出す見解は別として、この「ギャップ」のもつ積極的な側面を評価すべきではなからうか。いわば「世俗」そのものがそれとは相対的に独自性をもつ研究・教育機関としての大学を必要とし、「世俗」の「不確実性」が増大するにつれてその独自性の意義が高まっているとさえいえよう。流通産業の最先端にいる堤氏は、そうであるがゆえに「海図のない」流通変革を透視する拠り所を、流通・小売・消費と社会的諸活

動（政治、経済、社会、文化、情報化など）全体との関連づけ、したがって総合的で動態的な視点に求めた。

環境の「不確実性」のもとで「資本の論理」ではなく、それ以上に「人間の論理」からの経済（経営）・社会実践を考えるなら、その背後にある本質、基本原理を探求することが不可欠であり、文化、思想、価値観という「時代」そのものにたいする幅広い洞察が求められる。現実の矛盾ないし困難を主体的に把握する契機を発見することのなかに読書の意味と効用が認められはしないだろうか。「混迷の霧がたちこめているかに見える現代を、人間の未来にむかって透視する」作業——これは堤氏だけでなくわれわれの課題でもある。

（すやま けいすけ・商学部教員）

読書日記より

三谷 真

×月×日 桜井哲夫『言葉を失った若者たち』を読む
時代を憂えるのはいつも「大人たち」であり、当事者に

とっては、そんな大げさな、ということになる。すでに「おじん」の域に達した私には、著者の嘆きもよく分るし、若者たちの言い分もよく分る。中途半端な世代なのであるか。現象はつねに多様である。そのなかに多様でない意味を見出すためには、我々自身が言葉を持たなくてはならない。言葉を見つけ、言葉をきたえ、言葉をつたえる、それが社会科学である。伝わらなければ意味はない。そして、誰に伝えるのか、それもまた大きな問題なのである。

×月×日 藤原保信『政治理論のパラダイム転換』を読む。ありのままの事実、裸の事実といったものは存在するのであるか。フォーカスにしてもフライデーにしても、解説があるからこそ意味づけができていたのであって、涙を流している写真を目の前にして、怒りの涙なのか、笑ったあとの涙なのか、哀しみの涙なのか、写真そのものは何も語ってはくれない。事実とはつねにひとつの判断にもとづいてのみ存在するものであろう。事実判断とはすなわち価値判断のことである。事実と価値とのかい離をどう埋めるかは古くて新しく、そして重要な問題である。とりわけ、経済政策であろうと社会政策であろうと、政策論に関わろうとするならば、その問題を避けてとおることはできない。悪しき価値の相対主義に

陥ることなく、かつドグマを排し、おのれの価値原理が確立されれば、もはや学問する必要はなくなるだろう。

×月×日 村上陽一郎『科学的って何だろう』を読む。

「おまえの言うことは非科学的や」、「それは科学的な意見とは言えんな」というのが学生時代の論争時における切り札だった。しかし、今そんなことを言おうものなら、「科学的というのは何や」、「非科学的ではないかのか」と切り返されそうである。科学的＝真理、非科学的＝神秘的・宗教的：＝誤りという図式はもはやあてはまらない。いや、「もはや」ではなく昔からそうであつたのかもしれない。社会科学はもちろんのこと、自然科学でさえその「科学性」が問い直されているのだ。理性と科学が安直に結びつけられると科学万能主義やエセ進歩主義が生まれる。これこそがまさに非科学の極であろう。

×月×日 村上春樹『羊をめぐる冒険』を読む。職業としての小説家というのが一番ピッタリするのが村上春樹であるような気がする。内容よりも形式を重視し、その文体は一見無機質であるが練りに練られている。ある雑誌の村上春樹が書いているコラムに対する「さすがは村上春樹、読ませる文章を書いているけどまったくの無内容」という読書の投書が彼の全てを語っているといふのはちと言い過ぎか。彼の小説は文庫よりもハードカ

パーが似合っている。

×月×日 M・A・オーカン『平等か効率か』を読む。

問題は平等か効率かではなく、平等と効率のほずである。しかし、その問題は単純ではない。平等と効率は理論的にも、現実的にも両立しないものらしい。効率とは投入と産出との関係である。より少ない投入でより多くの産出が得られるならば効率は高いといわれる。投入を一定とするならば、より短い時間でより多い産出が得られるならば効率は高くなるわけである。時は金なりとはうまく言ったものだ。効率は高ければ高いほどよい、というのは、資源に限りがあるとする限り、どんな世の中にも正当性をもち得るようは一見したところでは思える。しかし、効率至上主義は近代が生み出したものではなかつたか。それとも、効率性を追い求めてきたのは「人間そのもの」だったのであろうか。平等か効率かを言う前に、効率そのものを洗い直してみる必要があるだろう。それは、必然的に近代批判へと向っていくはずである。

×月×日 丸山圭三郎『文化のフェティシズム』を読む。小学校三年生から十三年間住んでいたアパートはなぜか文化住宅と呼ばれていた。今でも〇〇文化というのはよく見かける。六帖と三帖と台所・トイレだけの部屋に一家四人が住んでいて、どこが「文化」だという気が

しないではなかった。それでも、今なお「文化」という言葉のもつひびきは、私にとっては魅力のあるものである。要するに、文化人とよばれてみたいのだ。これも大いなる幻想のひとつであろう。丸山圭三郎はいつも私の世界観・人間観をぶっこわして、ひっくり返してくれる。刺激的な書物だ。

×月×日 フランシス・ニュートン 『抗議としての「ジャズ」を読む。音楽は読むものではなく聞くものである。しかし、読まなくてはわからない音楽もある。全てのジャズがそうであるとは言わないが、読むことによつて聞くことが刺激される。音楽は読むことを通じて時代を見せられる。著者フランシス・ニュートンは、あの著名な経済史家のE・J・ホブズボームであるらしい。ジャズの好きな私も、ホブズボームのようにえらくなれるかもしれない。

(みたに まこと・商学部教員)

A君の将来

隈元 昭

二〇××年の某大学の入学試験場には特別な一室が設けられていた。文部省の強力な方針により、大学でも特進コースが設定された為である。ここに集まる学生は、いづれも童顔であり、平均年令は十六才ぐらいである。会場内にはコンピュータ端末が数十台並び、これらの端末にはディスプレイ装置が装備され、受験に際する注意事項が管面に表示され、静かに受験生を待っている。

A君は会場に入ると直ちに指定の席に着席した。第一限の科目は学力テストである。管面に次から次へと表示される問題に対し、机上の白紙を使って検討した後、管面に表示された解答群の中から正解と思われるものを指で選んでいく。第一限の終了と同時に、全受験生のデータが処理されて、次の科目の受験に必要な学力に達していない者へは、その旨のメッセージが管面に出力される。これだけのことであれば、一九八六年現在の技術でも

って十分に電算処理で試験を行なうことは可能である。新システムの導入の狙いは次の時限にある。第二次限のテストは創造力テストである。本テストを管理するプログラムは、文部省の大型プロジェクトとして開発されたもので、最新の人工知能の研究成果に基づいている。テストはコンピュータとの対話形式で行なわれる。A君が志望の学科に入ったとして、将来發揮するであろう創造力をチェックする。このシステムは一種のエキスパートシステムで、プログラムには心理学者、教育問題専門家等の能力開発・能力測定に関する知識が、データベースとして貯えられている。各大学ではこの標準化創造力テスト支援ソフトウェアを基に、大学独自の工夫も織り込んで、受験生の知的創造に関するポテンシャルを求めめるべく入試プログラムを作成している。A君の表情は真剣である。A君の将来はこの一瞬にかかっている……。

評論家竹村健一氏(その評価は本拙文の目的ではない)は、人間と機械の調和を説く一方、「もともと人間はズボラなもので、そのためにいろんな機械を造ってきた」旨のCM発言をしている。幸か不幸か、今日の技術はまさに長足の発展を遂げつつあり、機械文明から自由である人は皆無といえよう。世界の片隅で、一部の好事家の始めた仕事、年月と共に君の、友人の、私の身近なところ

ろに顕現する。気がついてみると、自分の人生の大部分がこれらの機械文明に左右されていることもしばしばである。

人工知能(AI, Artificial Intelligence)は最近AIフィーバーともいえる過熱状況を日本に引き起しており、エキスパートシステムの利用と共に医学診断のコンピュータ処理等、新聞紙上を賑わせていることを周知の方も多いと思う。私事ながら、筆者が日本自動制御協会の論文誌編集委員を勤めていた期間中の昭和五九年一月号「システムと制御」誌では、「認知科学の工学へのインパクト特集号」が刊行された。認知科学は、人工知能の研究者にとつては現状のAIの壁を打破する必要からも熱い眼差しを送られている学問であり、人間の知的活動のモデル化・知識獲得過程の研究等を扱っている。これらの成果は日を経ずして、我々の日常の中に出現するであろう。

学問、技術は普遍的であり、必ず拡散する。A君の事例を是と見るも否と見るも自由であるが、またしてもアメリカから、AIショックが日本に上陸しつつある。文系、理系を問わず、人工知能・知識工学・認知科学といった新しい潮流に頭能のトレーニングを積んでおく必要がある。この拙文で文末の書を取り上げるゆえである。著者、白井良明氏は電子技術総合研究所の第一線で活

躍しており、本書は氏の研究も踏まえたAIに関する極めて平易な解説書である。AIの要素技術であるビジョン・自然言語処理・知識工学、AIの研究開発環境、認知科学等について、簡潔ながら要領良く言及している。誤解を避けるためにつけ加えると、氏は決してコンピュータ狂ではない。著者の意図するところは、AIの歴史、メカニズム、現状を述べ、その限界を明らかにし、課題を提供し、「人間あるいは自分自身がどのように考えているかを内省することによって、AIの再前線を一步進める」ことにある。

本書を読み進むにつれて、先進国、日本の基礎的学問に対する弱さが、同時に日本人の新規知識に対する吸収の早さが首肯されるであろう。技術のカルチャーフローは依然アメリカより日本に流れている。AIの分野においても、アメリカの基礎研究の上に、商品化の可能性が見えた時点で、日本の各企業がアメリカへ日参している。このあたりの事情は日刊工業の近刊、NKブックスAIウォーズに詳しく、併せて一読されたい。

等者は、AIにおいても特に機械と人間のインターフェイスの設計において、東洋人独特の繊細な感覚を発揮することに、日本人の成し得る仕事があるかどうかと考

えるが、このあたりの記述が本書に望まれる次第である。
● 白井良明著「人工知能とはなにか」岩波書店発売刊
ニューサイエンスエイジ15

(くまもと あきら・工学部教員)

三橋修と「辨べない身体」

池田 進

読む者に不思議な衝撃を与える三橋修の著書「辨べない身体」(三省堂、一九八二年、一、七〇〇円)を紹介しよう。

その衝撃は、身体の中に社会をみつけ出すことによって管理の理論から離脱し、「求心的な道具的身体観から離脱したものたちが、周辺から四方をとり囲み、遠心的につくられた周辺こそが主体となつて、求心的に道具的身体観を撃つ」という巨視的な戦略地図を描こうという構想の大きさと、それをささえる知識量の特異の感銘を与えるところからくる。だからといってこの書が、イデオロギーを前面に押しだした運動論をくりひろげるわけ

ではない。それはまさに三橋自身の身体のうめきを昇華させることから始まる。むしろニューアカデミズムに通じる質のよさを感じさせるすぐれたエッセイである。

三橋と話をしていると、彼はいつも居地悪そうに長い手足を折りまげたり、もじもじさすったりする。見ている私は長い手足だなど思うだけだが彼はいちはやく、自分の手足がぶつぶつ文句をいうその声にきき耳をたてることができる。彼はそのような人間なのだ。

教師の前でつぶつぶたり、街で単車を暴走させている兄ちゃんたちが、一服して休憩しているときはどうしてああいうしやがみ方をするのだろうか。あのヤンキー坐り、私もまねしてやってみたが、後にひっくり返りそうでなんとも疲れる姿勢なのだ。だがやってみると、案外、みえも外聞もなく気がやすまる姿勢でもある。そして、あつと気がついたのだが、あれは、お百姓さんが田の畔で一服つけたり、稲と話をしたりしているときのあの身体なのだ。

三橋の「嫌べない身体」は身体のありように現れる様々の相をみとおして、それを支配する変数をぬき出してみ

ようというものである。彼はその変数を人間の身体がおかれている「状況」に絞りこむ。

この書で最も重要であり、また、彼が精彩を放つのは第三章だと思ふ。

ここでは二つの身体観が述べられる。ひとつはアルカイックな身体観であり、ひとつは近代の身体観である。

アルカイックな身体観は、相同的にアルカイックな社会構造に重ね合わされる。アルカイックな社会では、「個」はイエ、ムラ、ムラはずれへと、あらゆる生活上の重大事件とからみながら遠心的に、同心円的に拡がっていく。いっぽう、アルカイックな身体観は、たしかに中心に身体の中に宿る生命感がすわるのだが、その生命の原理は例えば個的な生殖の衝動が、祭祀や儀礼において個的ではないアニミステイックな所作に、さらには死と再生という身体の辺縁部分にまで遠心的にイメージを拡げることとみられるように、アルカイックな身体はつねに生活のあらゆる重要事とかかわる同心円の構造をなしている。この意味で、人間の古層においては、社会と身体の構造は相同的にびつたり重なり合ってしまう。

いっぽう近代は、あらゆる装置によってアルカイックな同心円的世界を破壊し、個を等質の中の単なる一区

画とみなしてしまふ。三橋はこのような個をシャボン玉の中の移動人間とよんでいる。その近代は当然のことながら、同心円的身体の構造をも破壊する。つまり個は固有名詞を備えたひとりの人間の身体としてではなく、今の時間におけるトレイトとして対象化されていく。自らもその目で自分の身体をみる事ができるし、そしてその目で他人の身体をもみることができるとだ。他者が人の身体をひとつの対象としてみる事ができるようになつたところに、身体のおかれてくる近代的状況の完成を見出すことができる。この視点からおのずと彼の第四章の帰結がもたらされることになる。

彼の文章は明快で、いわゆるニューアカデミズムのくさみはない。だがその内容は今でいうニューアカデミズムである。何がニューアカデミズムかといわれると困るのだが、彼の依拠する演繹の論理が、形式としての論理をととのえているのではなくして、彼の身体の「感覚」にもとづいた論理である点にひとつの尖鋭さがみてとれるのだ。

彼はインベーターみたいに自分の目や耳や鼻や口や皮膚を自分の身体はどこにでももぐり込ませることができる

る。自分どころか誰の身体の中にでももぐり込んで、身体のみしみを感じ、内側からきしみの原因の外の世界をじつとうかがうことをする不思議な人間だ。それは彼が、演劇できたえられた感受性の持ち主であるからでもある。けれど、彼が展開する論理の根っこにはそれをも含んだ彼独自の「方法なき方法」がある。この彼の独自の方法がわれわれのカラダにベタに即したヤリキレナサをえぐり出してくるところに、この書の不思議な衝撃力のもうひとつの源泉があるのだろう。

(いけだ すすむ・社会学部教員)

内藤湖南と「北朝鮮ルート」論

西 重 信

はじめに

一、「北朝鮮ルート」

二、一九〇八年（明治四二）の間島旅行

三、「間島ノ地勢」

四、「間島鉄道意見」

五、「間島問題協定案私議」

おわりに

はじめに

ここ数年の日・朝・中関係の新しい動きの一つとして、中華人民共和国、朝鮮民主主義人民共和国と日本とを結ぶ貿易交通路の開通がある。つまり、北朝鮮の清津港から朝鮮半島東北部を縦断して中国の延辺へ通じる交通路である。だが、このルートは決して新しく発案されたものではない。「満州国」が存在し、「満州」（現在の中国東北部）が日本の「生命線」などとうたわれていた時代には、裏日本から「満州」へのルートとして、大連港ほどではないにしてもさかんに利用されていた交通路である。かつてのル―

トが、日本を中心とした帝国主義的なものであったのにくらべて、今日、革命と解放をへて独自の経済建設をすすめている中国と北朝鮮が、大連港の混雑を避けるために利用する貿易交通路とでは根本的な違いがある。しかし、このルートの本来の発案者は内藤湖南であり、その条約上の根拠は「間島に関する日清協約(間島協約)」であった。湖南によつて発案された新しいルートは、その後、鈴木武雄によつて継承、発展させられてゆくことになる。

注(1) 昨年、延辺朝鮮族自治州を訪問した西川潤氏によると、この州は吉林省の窓口として一級対外開放地区に指定され、国境の図們市と朝鮮民主主義人民共和国の清津との間ではすでにトラック輸送が実施されている。日本側では飯野海運が清津港を利用している。詳しくは「公明」(一九八五年一〇月)を参照のこと。

(2) 内藤湖南と「間島協約」については、拙稿「内藤湖南と『間島協約』」(関西大学学生協「書評」第七三三号、一九八五年四月)を参照のこと。また間島・延辺については鶴嶋雪嶺教授と筆者の「朝鮮人の間島入植と日本の朝鮮政策」(関西大学「部落問題研究室紀要」第四号、一九七八年)と、鶴嶋教授の「中国延辺地方の朝鮮人」(季刊「三千里」第八号、一九七六年)、「韓国統監府臨時間島派出所の報

告書を通して見た間島の朝鮮人」(甲南大学「甲南経済学論集」第一九卷第四号、一九七八年)、「Korean Immigrants in Kando in 1920's」*Kansai University Review of Economics and Business*, Vol.7, 1978, 44-5
“The Effects of the Cultural Revolution on the Korean Minority in Yenchien” *Korean Studies*, Vol.3, The University Press of Hawaii, 1979 を参照のこと。

一、「北朝鮮ルート」

いわゆる「北鮮ルート」とは、鈴木武雄『北鮮ルート』論の定義を借りれば、「日満ブロック経済に於ける経済的流通路の一つであつて、北鮮三港及び北鮮鉄道線を経由して満州国に出入する経路」をさす。この「北鮮三港」とは、今日の朝鮮民主主義人民共和国の羅津、清津、雄基である。

「満州事変」後の「満州国」の成立によつて、日本の「満州」侵略が一期を画した当時、このルートは、朝鮮の新義州から鴨緑江を渡り、安東から奉天を結ぶ安奉線を使つて満州に入る「安奉ルート」、海路から大連に上陸する「大連ルート」と並ぶ三大ルートとして注目されていた。とくに舞鶴や敦賀などの日本海側の諸都市では、日本海を湖水化して裏日本と満州を結ぶ交通路として大きな期待

を集めた。「北朝鮮ルート」は、「満州事変」後の次のような諸鉄道の開通をもって完成した。

1、図們線の完成

雄基を起点として豆満江岸を走る図們線は、一九二六年に着工し逐時営業しつゝあつた。一九三二年に朝鮮鉄道局は、この図們鉄道株式会社を買収し、翌年、雄基から豆満江岸に沿つて会寧、清津、京城を結ぶ全線が開通した。一九三四年から京城と雄基間の直通列車が運行され始めた。

2、京図線の完成

一九三一年から満鉄によつて路線測量が始められていた吉会線、すなわち敦化からの延長線は一九三三年に敦化と図們間の営業が開始された。同時に新京（長春）と図們間を「京図線」と改称した。同年、図們と南陽との間に豆満江橋梁が完成し、図們線と接続された。それとともに清津と新京間の直通列車の運行が開始された。

3、朝開線の営業開始

京図線の朝陽川から龍井村を經由して、開山屯から豆満江を渡つて上三峰に通じる鉄道は、日中合弁の天図輕便鉄道株式会社によつて経営されていた。「満州国」は一九三四年にこの鉄道を買収し、満鉄によつて広軌

鉄道に改築された後、あらたに「朝開線」として営業を開始した。

4、拉濱線の開通

ハルピンから五常を經由して京図線の拉法に致る鉄道である。「満州国」が東支鉄道（北滿鉄道）を接収するまでは、同鉄道南部線の對抗線であつた。一九三四年に営業を開始した。

5、東支鉄道の接収

一九三五年、ソ連邦は一九〇三年に帝政ロシアが敷設して以来、その権利を保有してきた東支鉄道を「満州国」に譲渡した。これは、「満州」からソ連邦の勢力が排除されただけでなく、ウラジオストツクの価値が半減されたことでもある。

6、図佳線の開通

京図線の東の終点図們から北上し、牡丹江を經由して佳木斯に至る鉄道である。図們と牡丹江間は一九三五年に開通、一九三七年には佳木斯まで全線開通した。「北滿州」の流通に一大転機をもたらす鉄道の開通であつた。

7、虎林線の開通

図佳線の林口から密山を經由してウスリー江岸の虎林を結ぶ。一九三五年に林口を密山間が仮営業を開始



し、翌年全線が開通した。終点虎林の対岸は、ウスリー江をへだててソ連邦ウスリー鉄道の主要地イマンである。

まさに、朝鮮の図們線と満州の京図線を基幹とした大動脈というべき鉄道網の完成である。そして、朝鮮と「満州」とをどのようなルートで結ぶのが、「北朝鮮ルート」論の主題であったことがよくわかる。この間、一九三三年には北鮮鉄道の経営と清津、雄基二港の埠頭経営および羅津港の建設が満鉄に委託された。鈴木氏によれば、この「北朝鮮ルート」の完成は、「満州」の経済に画期的変革をもたらすものであった。

第一に、それは「満州」の流通経路の変革である。東支鉄道（北鉄）のために、それまでの「満州」経済は、ウラジオストックを海港とする「北鉄圏」すなわち「北満型」経済と、主として大連港を海港とする「満鉄型」すなわち「南満型」経済とに分けられていた。ところが東支鉄道の接は、満鉄による大連と黒河間の南北大動脈の縦貫を実現させ、「南満」と「北満」の対立を解消させた。これに加え、図佳線の開通は、新しい南北動脈の完成であった。これによって、従来の南北経済圏にかわって、あらたに「東北満」経済圏と「西南満」経済圏が出現するであろう。つまり、「満州」の経済は横割りから縦割りへと変化するというものである。鈴木氏のいう「北鮮三港」と「北朝鮮ルート」は、この新しい「東北満」経済圏を朝鮮を経由して日本に結びつけるものであった。

第二に、流通経路の変革の見通しのうちもつとも大きなものが松花江水運への影響であった。ハルピンが東支鉄道のたんなる中間でありながら「北満」市場の中心として栄えた原因は、東支鉄道南部線によって「南満州」に連なり、かつ松花江の水運によって「北満」を支配するという交通上の要地であったためである。「北朝鮮ルート」と図佳線を経由しての日本商品の流入は、永い間ハルピンが君臨してきた経済上の王座の地位を動揺させるのであ

る。なぜなら、松花江は図佳線によつて佳木斯で上下流を切り離されるばかりか、黒龍江に連なる下流は逆に「北朝鮮ルート」の延長となるからである。これは、「東北満」経済圏がハピンと大連の市場的支配を離れ、「北朝鮮ルート」の独占的市場を形成することを意味する。

第三に、「東北満」経済圏の市場的価値の増大である。⁶¹

「東北満」地方とは、当時の間島省の全部、吉林省の三分の一、濱江省の一部、三江省と牡丹江省の全部をさす。これらは、「満州国」総面積の一八%を占めるが、総人口のうえでは九%に過ぎない。すなわち「東北満」経済圏は、朝鮮よりも広く、逆に人口密度ははるかに低い。未開発の農業、林業、鉱業地域として、そして日本人農業移民と古くからの朝鮮人の移住地として、あるいはそれにとまなう商品市場として「東北満」経済圏の前途に大きな期待がかけられている。

鈴木氏は、後年、当時朝鮮を飛び越えて「満州」に向いていた日本の一般的な考え方に対し、朝鮮をもっと重視させようとする気持が『北朝鮮ルート』論となつて表われたと述べておられる。⁶²しかし、この『北朝鮮ルート』論をみる限り、朝鮮は付随的なものであつて、あくまでも満州市場を対称にした考えであることは明らかである。同時に、鈴木氏は、「北朝鮮ルート」という言葉は氏自身の発案であ



つたともいつておられる。⁶³確かに言葉自体は氏の発案であつただろうが、「北朝鮮ルート」の歴史の始まりは、氏も指摘しておられるように一九〇九年の「間島協約」であつた。第六条では、日本と清国との間で次のように定められている。⁶⁴

清国政府は将来吉長鉄道を延吉南境に延長し、韓国會寧に於て韓国鐵道と連絡すべく、其一切の辦法は吉長鐵道と一律たるべし。開辨の時期は清国政府に於て情形を酌量し日本国政府と商議の上之を定む。

すなわち、吉林と長春（「満州国」になつてからは新京）間の鐵道を朝鮮との國境にまで延長させ、さらに豆満江

を渡って会寧で朝鮮側の鉄道と連絡させるというものである。しかし、これは、一九二八年にわずかに吉林と敦化との間が吉敦線として開通しただけにとどまり、その後には遅々として進まなかった。その原因は、満鉄の「大連一港主義」にあったともいわれたが、日本の侵略に対する中国の抵抗が大きかった。このような「北朝鮮ルート」建設の過程はともかく、「北朝鮮ルート」の条約上の根拠である「間島協約」に与えた内藤湖南の影響を考えれば、このルートの発案者は実は湖南であったということが出来る。

注(1) 京城帝国大学法学会、「朝鮮經濟の研究 第三」(一九

三八年、岩波書店)三二二頁。「北朝鮮ルート」に関する

鈴木氏の論文には、その他「北鮮四港論」(一九三八年

三月五日〜十三日、『京城日報』連載)、「所謂北鮮ル

トに就て」(京城商工会議所『經濟月報』一九三七年一

一月)などがあるが、筆者は未見である。なお、ここに

みられる「北鮮」という呼称は、日本帝国主義によって

当時使用された朝鮮(人)に対する差別的な蔑称である。

(2) 同上書 三三三〜三三九頁による。

(3) 東支鉄道は、時期によって東清鉄道、中東鉄道、北満鉄道などとも呼ばれる。満州里とハルビン間を西部

線、ハルピンと綏芬河間を東部線、ハルピンと寛城子間を南部線という。寛城子と長春の間は、正確にいえば満鉄との連絡線である。

(4) 前掲書、三三二〜三三六頁。

(5) 同上書、三四〇〜三四六頁。

(6) 同上書、三四八〜三五六頁。

(7) 鈴木洋子『鈴木武雄』(金融財政事情研究会、一九八〇年)一〇六〜一〇七頁。

(8) 同上書、一〇五頁。

(9) 「間島協約」条文は、長野朗『満州問題の鍵関間島』(支那問題研究所、一九三二年)から引用。

二、一九〇八年(明治四二)の間島旅行

朝鮮の東北地方から豆満江を渡って間島(現在の中国吉林省延辺地方)に入る道筋は、非常に古い歴史をもつ。とくに咸鏡北道の会寧付近から渡河して新興坪、大拉子を経て龍井村へ至る街道は、朝鮮人の「満州」への移住経路としてよく利用された。中国人地主は、この街道筋で移住して来る朝鮮人を待ちうけて自分の小作人として迎えるとまでいわれた。むろん、その当時は、豆満江は現在のように朝中間で条約によって定められた国境ではなかつ

た。李朝は、自国民が豆満江を渡って間島や沿海州へと移動することを厳禁したこともあったが、冬期に氷結する豆満江ではそもそも取り締りを徹底させることは困難であった。このような移住経路は、いわば前近代の交通路といえよう。湖南は、これを朝鮮東北海岸から豆満江を渡り、「満州」東南部を横断して吉林、長春へ至る一貫した交通路として位置づけ、具体案を提唱している。

その第一歩が、明治四一年（一九〇八年）の間島、吉林旅行であった。いうまでもなく「間島問題」に関する調査旅行である。この旅行の様子は、湖南自身の筆による「間島吉林旅行談」と、同行した大里武八郎「北韓吉林旅行日記」から知ることができる。まず旅行の道筋を辿ってみよう。

明治四一年八月一三日に下関を出航し、釜山、元山、城津などの朝鮮東海岸の諸港に寄港しながら、八月一日に清津に上陸している。清津からは鏡城に立ち寄った後、富寧をへて会寧に到着。この間は人力による軽便鉄道を利用している。途中、朝鮮東北部の山脈茂山嶺を越える。豆満江の渡船場は数ヶ所あった様子であるが、湖南の一行は会寧下流の金世洞という所から渡河して間島に入った。当時、間島の龍井村には「統監府臨時間島派出所」が置かれており、湖南を出迎えるため会寧まで朝

鮮人「全某」が派遣されている。間島に入つてすぐに元良哈嶺（中国では火狐狸溝嶺と呼んだ）を越え、大拉子（ラハ）をへて八月二五日に龍井村に到着した。朝鮮から間島への道筋は、朝鮮人の移住経路をそのまま辿っている。龍井村にしばらく滞在しているのは、派出所との意見交換や朝鮮人の状態の視察、古蹟の見学などに日数を費したためであろう。九月六日に清国側の施政の中心地であった局子街（のちの延吉）を訪れた後、吉林への旅に出発した。銅仏寺をへて哈爾巴嶺を越えている。この哈爾巴嶺までが清国延吉庁の管内であった。哈爾巴嶺から敦化まで支那里程で九〇里ほど、この間湿地が多く、局子街から敦化まで約三〇〇里、雨と悪路のため七日間の行程を要した。さらに敦化から額木索まで約一二〇里、途中に通溝嶺の峠を越える。額木索以西ではしだいに湿地は少くなるが、満州語で「窩集」と呼ばれる大森林に出合う。「窩集」の中には「哈湯」と呼ばれる湿地が点在し一行を悩ませた。途中、張廣才嶺と老爺嶺を越える。老爺嶺から一三〇里で吉林に達する。額木索と吉林とは約三九〇里、吉林到着は九月二五日であった。吉林から長春までは、はじめは陸行する予定であったらしいが、実際には松花江を下るロシア汽船を利用した。東支鉄道南部線の陶頼昭に着いたのは一〇月三日であった。図は、湖



南が帰国後に『大阪朝日新聞』に連載した「間島吉林旅行談」に描かれている旅行図である。

湖南の辿った経路と旅行記をみれば、この旅行の二つの特徴をつかむことができる。第一に、朝鮮から間島への道筋が朝鮮人の移住路に沿っていることである。これは、「派出所」の配慮による朝鮮人の道案内があったからこそできたことである。第二に、通過してゆく地方の地勢、とくに山脈、湿地、土地の高低差、主要地間の距離といった点についてきわめて綿密な調査を行っていることである。この二つの特徴は、朝鮮人の移住経路を辿りながらも将来それを鉄道におきかえるという展望のもとに踏査されたことをよく示している。現に湖南の辿ったルートには、狭軌鉄道ではあるがもつとも早く朝鮮と間島を結ぶ鉄道が敷設されている。しかし、この旅行の意義は、次に述べる「間島問題私見」として表わされ、日本政府の政策に大きな影響を与えたという点に求められる。

注(1) 「間島問題」と湖南とのかわりについては、前出の拙稿「内藤湖南と「間島協約」」を参照のこと。

(2) 「間島吉林旅行談」、「北韓吉林旅行日記」とも「内藤湖南全集 第六卷」(筑摩書房、一九七二年)に収録されている。

(3) この朝鮮人名は、『全集』では「全」となっているが、内藤成申編「内藤湖南・北韓吉林旅行日記」（『朝鮮学報』第二一・二二合併特号）では「金」となっている。どちらが正しいかは不明であるが、ここでは『全集』に従った。また本文中のふりがなは、「間島吉林旅行談」のものをそのまま使用した。

(4) 『全集』四一五頁。

(5) 朝鮮の会寧から間島の老頭溝に至る狭軌鉄道である。豆満江の渡河地点は、会寧下流の上三峯である。橋梁の完成は一九二七年で、日中合併資本で建設された。

三、「間島ノ地勢」

「間島問題私見」は、「間島問題」について日本政府から諮問を受けた湖南が一九〇九年に外務省に提出した意見書である。その内容は、「間島ノ地勢」、「間島鉄道私見」、「間島問題協定案私議」、「附言」の四部からなっている。四部のいずれもが独立した内容であり、それぞれが独自の課題に対する結論をだしている。だが、「北朝鮮ルート」の発案ということからみれば、最後の「附言」を除く三部は一貫したものでなり、そのうちのどれ一つ欠けても不完全である。

まず最初に「間島ノ地勢」からみてみよう。「間島ノ地勢」は一言でいえば、明治四一年の旅行をふまえた「北朝鮮ルート」を模索する基礎的な調査結果である。そこでは、朝鮮から間島を横断して吉林に致るルート上の地勢が簡潔に記述されている。鉄道を敷設するうえで最大の課題となる山脈については、白頭山系の山脈をとくに系統だてて説明している。¹²⁾

長白山即チ韓人ノ所謂白頭山ヨリ東北二面ニ向テ分派スル支幹山脈ハ、恰モ手指ヲ開ケルガ如キ形状ヲ成セリ。其ノ手掌ニ当ル地方ハ長白山周圍ノ高原ニシテ、其中、東北二面ノ山脈ニ接近セルハ寒ニ娘々庫、及ビ古洞河地方ナトス。

そして朝鮮東海岸から吉林までに遭遇する六重の山脈を順を追って説明している。

其ノ各指トモ云フベキ山脈中、余ガ經過セル地方ニ於テ其ノ第一次ニ遭遇セルハ即チ韓国ノ茂山嶺ナリ。豆満江を渡つて間島に入るとすぐに遭遇するのが、「間島吉林旅行談」中にある「兀良哈嶺」つまり黒山山脈である。

黒山々脈ハ即チ余ガ第二次ニ遭遇セル支幹ニシテ、長白山周圍ノ高原ガ漸ク下リテ山形ヲ成セル牛心山ヲ起点トシテ豆満江ノ本流ニ治テ東北シ、其ノ北面ニハ

海蘭、布爾哈圖二河ノヤ、広行ナル流域ヲ控フ。
間島から吉林への途上の第三、四の山脈と地勢を次のようにいう。

間島ヨリ西北ノ方、吉林ニ向フ路上ニ於テ第三次ニ遭スル山嶺ハ老頭溝及ビ五箇頂子ノ複嶺ニシテ、既ニ之ヲ逾ユレバ布爾哈圖河ニ治フテ第四次ニ遭遇スル哈爾巴嶺ニ至ル。此間地勢漸次ニ高クナリ行クハ、其ノ漸次ニ長白山周囲ノ高原ニ近クガ為ニシテ、哈爾巴嶺ノ標高ハ黒山々脈ニ減ゼザルモ、之ヲ逾エル時ハ只ダ坡陀タル小丘ヲ過グルノ恩ヲ為シ、寧口其ノ急峻ノ度ハ老頭溝、五箇頂子ニ及バザルコト甚シキヲ覺ユ。最後に、第五、六の山脈が張廣才嶺と老爺嶺である。

敦化ヨリ牡丹江ニ沿テ北上シ額木索ヨリ殆ド正面ニ向テ第五次ニ遭遇スルヲ張廣才嶺トス。敦化以北ハ高原ヲ背ニシテ益々之ヲ離ル、ヲ以テ、此ノ張廣才嶺ハ夙カニ牡丹江流域ヲ抜キテ山勢峻絶ヲ致セリ。此ヨリ益々西シテ老爺嶺（前ノ同名ノモノト異ナリ）ニ至リ第六次ノ山脈ニ遭遇ス。

そして、以上の地勢は次のように結論づけられている。

此ノ如キ地勢ナルヲ以テ、間島ヨリ韓国六鎮ニ至ルニハ、単ニ一重ノ黒山々脈ヲ逾ユルノミナルモ、其ノ敦化ニ至ルニハ、老頭溝嶺ヲ逾エテ更ニ哈爾巴嶺ヲ逾

エザルベカラズ。寧古塔ニ至ルニモ高麗嶺ニ連続セル太平嶺ヲ逾エテ更ニ老爺嶺ヲ逾エザルベカラズ。隨テ其ノ距離ニ於テモ、間島ノ中心トモ云フベキ龍井村即チ清名六道溝ヨリ韓ノ会寧ニ至ルニハ我が十二三里ニシテ、鍾城ニ至ルニハ更ニ近シト雖モ、其ノ敦化若クハ寧古塔ニ至ルニハ皆三十五六里乃至四十里以上アリトス。

つまり、間島を中心にしていえば、地勢上からも距離のうえからも吉林、敦化方面よりも朝鮮方面への交通の方が容易であることがいわれている。ここから、間島は歴史上および地勢上朝鮮に属するという湖南による重大な結論がだされるわけであるが、「北朝鮮ルート」のうえからみると間島の所属はそれほど重要ではない。むしろ、これらの地勢が、ルートを決定するうえにどのような影響をおよぼすのかの方が重要であつた。その具体的な検討が、次の「間島鉄道意見」である。

注(1) 「間島問題私見」は、全文が『全集』に収録されている。

(2) 「全集」五六四―五六七頁。以下同様。

(3) 湖南の調査、研究上の結論である。詳しくは「間島

吉林旅行談」（『全集』四二七―四二八頁）および拙稿

「内藤湖南と「間島協約」を参照のこと。

四、「間島鉄道意見」

「間島鉄道意見」は、「間島問題私見」の中でも決して長文のものではない。しかし、まさしく湖南が「北朝鮮ルート」の発案者であったとともに、「北朝鮮ルート」論の創始者でもあったことを決定づける内容である。この「意見」では、冒頭に次のように述べられている。

若シ間島ニ鉄道ヲ敷設スベシトセンニハ、其ノ一端ハ清津若クハ附近ノ海口ニ起リ、而シテ他ノ一端ハ之ヲ吉長鉄道ニ連絡セシムベキ者タラザルベカラズ。

具体的な「北朝鮮ルート」の決定である。むろん、この提言の前提には、すでに一九〇七年に日本が獲得していた吉長鉄道の借款権があった。これに続く「意見」の内容は、おおきく二つの点におよぶものである。

第一点は、大連と長春を結ぶ南満州鉄道との運行距離、敷設工事の難易度の比較である。

清津ヨリ局子街ニ至ル距離ハ概算百哩ニシテ、局子街吉林間ハ概算二百七十哩アリ、之ニ吉長鉄道凡ソ七十余哩ヲ加フレバ清津長春間ハ凡ソ四百四十哩ニシテ長春、大連間ト大差ナシ。然ルニ其間ニハ凡ソ六重ノ山嶺アリ、其ノ中老頭溝、哈爾巴嶺ヲ除ク外四重ノ山嶺ハ皆隧道ノ必要アルベク、其ノ平地モ亦満州語ニテ



廣島被爆者

哈湯と称スル大湿地ノ到ル處ニ之アルガ為、工事ノ困難ハ長春大連間ノ比ニアラズ。

清津を起点として局子街と吉長鉄道を経由して長春に致る距離は、大連と長春間と大差はない。しかし、六重の山脈と湿地帯を突破しなくてはならない「北朝鮮ルート」は、敷設工事においてきわめて不利というものである。具体的に隧道の必要な山脈をかかげることができるのは、前年の踏査旅行の成果にほかならない。「間島ノ地勢」は、この意味でルート決定の基礎であった。

第二点は、通過する地方の産業、つまり農業と林業との関係を検討している点である。まず沿線の農業との関

係については、湖南の評価はきわめて否定的である。と
いうのは、間島を除いた吉林までの地方では、いまだ農
業が未発達であつたうえ地質、地勢上から近い将来に著
しい発達をのぞむことはできないと考へられたのであろ
う。湖南は、次のようにいつている。

而シテ其ノ經過スル地方ハ吉林以西ヲ除ク外ハ、地
味ノ沃饒ナルコト間島ニ過ギタル者ナク、而カモ間島
農産千中部満州ニ比シテハ実ニ微小言フニ足ラズ、敦
化地方ノ如キハ最モ湿地多キ高原ニシテ、現在ニテハ
多ク鴉片ノ原料タル罌粟ヲ栽植スルガ爲ニ頗ル収益ア
ルモ、此ノ栽培ガ三年ヲ限り禁止セラル、重大ノ問題
トシテ大ニ若心セルコトヲ親シク語レリ。其他ノ農産
ハ其ノ成績、間島ニ比シテ大ニ劣レルガ若ク、額木索
敦化間ノ若キモ皆一樣ナリ。

湖南の予測どおり、この地方の農業の発達には、その
後かなりの時間が必要であつた。しかし、その発達を促
進させたのはほかならぬ鉄道であつた。とくに一九二八
年の吉敦線の開通は、大量の中国人移民をこの地方に吸
収し、北上してくる朝鮮人移住者とあいまつてめざまし
い発達をうながした。むろんその主役は、はじめて水田
耕作をこの地方で試みた朝鮮人であつた。だがこの地点で
は、湖南が注目しているのは農業ではなく老爺嶺と張廣

才嶺の森林である。

故ニ此ノ一路ニ於テ将来最モ主要ナル物産タルベキ
望アル者ハ、張廣才嶺及ビ老爺嶺ノ大森林アルノミ。
まったく未開発のままであつたこれらの森林は、農業
とは対称的に高い評価が与えられている。

若シ鉄道ノ開通ニヨリテ此地方ノ森林伐採ノ途ヲ開
カバ、其ノ重要物産タルベキハ疑ナシ。此外哈爾巴嶺
ニ連続セル老爺嶺山脈及ビ黒山々脈ニモ猶ホ多少ノ森
林アルガ若シ。

もつとも、無条件に評価されたわけではない。次のよ
うな条件がつけ加えられている。

然レドモ我邦ノ北海道、及ビ秋田ノ如キ林業地ヲ対
岸ニ有シテ北韓ノ海口ニ吐出セラル、此等林産ガ相当
ノ収益アルマデ猶ホ幾多ノ時日ヲ要スル者ト看ザルベ
カラズ。

湖南においては、「北朝鮮ルート」の経済的な価値が森林
資源の開発にあつたことが明らかである。

以上二点の検討を行ったうえで、このルートの価値を
次のように評価している。

サレバ現今ニ在リテハ此ノ予定鉄道線路ハ敦賀ニ連
絡シテ大連ノ競争線タル外別ニ非常ナル希望ヲ属スベ
キ者ニ非ザルガ若シ。但ダ蒲塩斯徳ノ自由港閉鎖サル

ルニ於テハ北滿州ノ貿易ニ影響ヲ与フルニ足ル者アルベキト、軍事上東清線ニ対シテ有力ナル圧迫ヲ加ヘ得ベキトヲ以テ其ノ特長トスルニ過ギザルベシ。

つまり、「大連ルート」の對抗線、ウラジオストツクも閉鎖されたときの北滿州の貿易に対する影響力、ロシアの東清線（東支鉄道）への軍事的影響力の三つが「北鮮ルート」のもつ特徴とみなされている。ことさらに高い評価とはいえないが、一九〇九年にはウラジオストツクの自由港閉鎖があつたことを考えあわせれば、きわめて適格な判断であつたといえよう。そして「間島鉄道意見」の結論は、明瞭な一言である。

故ニ此ノ路線ニ関スル權利ノ保留ハ必要ナルモ、近キ將來ニ於テ之ヲ実行スベキ者ニ非ザルハ論ナキナリ。すぐに着工すべきではないが、鉄道敷設権は保有しておく必要があるという結論は、次の「間島問題協定案私議」へとうけつがれてゆく。

注(1) 『全集』五六七、五六九頁。以下同様。

- (2) 中国本土から滿州への中国人移住については、鍛冶邦雄「一九二〇年代における中国人の『滿州移住』について」(『関西大学商学論集』第二卷六号、一九七七年)を参照のこと。

五、「間島問題協定案私議」

「間島問題協定案私議」は「間島協約」に大きな影響を与えた、というよりも「間島協約」は「私議」のひき写しであつたという方が適切である。「北朝鮮ルート」に関してみても例外ではない。「間島ノ地勢」、「間島鉄道意見」によつて展開された湖南の「北朝鮮ルート」論は、「私議」において具体化への提言が行われている。間島の領土権と交換にだされている九項目の条件のうち、鉄道の敷設権をうたつた最後の項がそれである。

將來ニ於テ吉林ヨリ右地域内ニ達スル鉄道ヲ敷設スルコトアル場合ニハ必ズ之ヲ韓国海岸マデ延長スベク其資本ハ日清韓三国ノ合同負担トスルコト又清韓兩國トモ此ノ予定線路ノ成立ヲ妨グベキ他ノ線路ヲ計画スベカラザルコト。

「間島鉄道意見」に、さらに敷設資本を日本、清国、朝鮮の三国が合同で負担すること、そして、このルートの競合路線の計画すら禁じるという二点に加えられている。まさに独占的な鉄道敷設権の獲得をめざす提言である。この提言は、「間島協約」第六条にうけつがれ、ここに「北朝鮮ルート」の条約上の根拠が整うことになる。

朝鮮から滿州に入るルートは、いうまでもなく「北朝鮮



原爆の図(丸木位里・丸木俊 作)

ルート」だけではなかった。それよりも先に完成され、より活発に利用されたのが「安奉ルート」である。両者の相違は、「安奉ルート」がそもそも日露戦争中に満州の日本軍への軍事輸送を目的として敷設された安奉線(鴨緑江岸の安東から奉天に通じる狭軌鉄道)を基幹にして、いるのに対して、「北朝鮮ルート」は古来からの朝鮮人の移住路に沿って鉄道を敷設するという点にある。さらに、前者が開拓の発端と活用の方途においても軍事用としての比重が高かったのに比較して、後者は湖南の「北朝鮮ルート」論からも理解できるように、どちらかというに沿線の産業や資源の開発とのかかわりで立案されたという

違いも著しい。しかし、両者に共通した点は、そのいづれもが日本の「満州」侵略の動脈としての役割を果たしたことである。「安奉ルート」はいうにおよばず、「北朝鮮ルート」が一躍注目され始めるのは、間島地方が「北門の宝庫」²⁾とうたわれた大正末から昭和の初頭にかけてである。原料、資源の供給地として、あるいは日本資本と商品の輸出先として、間島の価値が見い出され始めた表われである。「満州事変」後の「北朝鮮ルート」の完成は、たんに一本の交通路が完成したことにとどまるのではない。間島から「南満州」へ、さらには「北満州」へと、「満州国」の成立後新しい段階へとすすんでゆく日本の侵略をささえる一大ルートが整えられたことを意味する。まさしく湖南は、このルートの発案者であった。

注(1) 『全集』五七一頁。

(2) 湖南は、「間島問題」の調査、研究のため、明治三九年(一九〇六年)にも朝鮮に渡っている。この時、彼は「一進会」や「黒龍会」関係者と緊密な連絡をとりながら活動しているが、そのうちの一人に牛丸友佐がいる。この牛丸らによってとなえられたキャッチフレーズが「北門の宝庫」である。彼は、後に京城で「朝鮮及朝鮮人社」を設立し、『最近間島事情』を出版して



世人の眼を間島に向けさせた。湖南とこれらの人物との関係については、他稿を期してみたい。

おわりに

かつて矢内原忠雄氏は、日本の「満州」侵略過程を「特殊權益」の内容から四期に区分されている。¹¹⁾

第一期 一九〇五年の「ポーツマス条約」と「日清満州善後条約」による日露戦争の収獲としてのもの。吉長鉄道借款権や安奉線の改築経営権などがある。

第二期 一九〇九年の日清間のいくつかの問題の解決。「間島協約」の締結とひきかえに、安奉線の改築や撫順、煙台炭坑の返還要求などを日本の思惑どおりに処理した。¹²⁾

第三期 一九一五年の「南満州及東部内蒙古に関する条約」によるもの。さきに獲得していた吉長鉄道の続借款契約がある。

第四期 一九一八年の「西原借款」前後のもの。吉会鉄道借款、満鉄による吉敦鉄道工事請負契約はこのときである。

この時期区分に湖南の「北朝鮮ルート」論を重ねてみれば、時期的には第一期から二期への過渡期に当たるが、

湖南が「間島協約」に与えた影響をみれば第二期の中核をなすといってもよい。「北朝鮮ルート」がもつ二つの側面、つまり日本の「満州」侵略ルートとしての役割と朝鮮と「満州」東南部を結ぶ近代的交通路としての経済的合理性は、湖南のなかでどのように位置づけられていたのかは今後の研究課題である。

注(1) 矢内原忠雄「満州問題」(「矢内原忠雄全集」、第一〇卷)

(2) 拙稿「内藤湖南と「間島協約」」を参照のこと。

(にし) しのぶ・本学経済学部卒業生

— 連 載 —

聞き書き一部落に生きる人たち⑩

解放研究生徒との話し合いを

話し手 坂本真由美^{さん}
1958(昭和33)年8月23日生

聞き手 田宮 武

部落のことを恥^よずかしく感じた

八鹿闘争の裁判が神戸地裁で審理されていますが、
ぼくが今まで聞きとりをしているのは八鹿闘争に
いたるまでの部落の歴史だとか、大正末から起こった
水平社運動だとか、戦後の南民協の運動だとか、そ
れから部落の生活の状況だとかを聞いているんです。

まあ、子どもの時からの話で、自分が小学校、中学
校で部落問題にかかわって経験したこととか、八鹿
高校でどういう動機から解放研に入るようになった
のかとか、八鹿闘争にいたるまでにどんな考え方で
活動をすすめていたのかとか、お父さん、お母さん
から聞いていた昔の部落のこととか、そういうこと
を話していただけるといいと思うんですけど。

自分が部落だと、いつごろ、どういう形で教えて
もらって知ったのか。はじめて部落のことを聞いた
のはいつかと、いろんな人に聞いていくと、一般的
にいうと遅いようです。たとえば中学生になるまで
知らなかったとか、かなり大きくなってから初めて
聞いている場合が多いみたいです。部落の周辺の人た
ちに聞くと、もう早くから、あの子は部落の子やと
知っているのに、当の部落の子は、本当に遅れて分

かるという状態だったようです。そういう傾向があるように思うんですけど、坂本さんの場合は年齢も若いし、事情も違うかと思うんですが、いつごろ、どういう形で、部落のことについて聞きはったんですか。

坂本 もう、部落とかそんなんは小学校の高学年になってからうすうす感づいたぐらいで、それまではそういうことを全然聞いたこともなかったし、知らなかったけど、でもなんとなくやっぱり「違う」っていう感じはずっと受けてました。で、私とごろの同級生の人っていうと、みんなそんな感じで、なんか違うなあという感じで……。もうちよつと大きくなつたら……「おかゆさん」（茶がゆ）がありますね、あれを（食べてると）なんとなく言っちゃいけないことなんだいうみたいに、いつからか（そういう気持ち）あつたし。まあ、部落のことをなんにも思わん子どももいたけど、なんとなく恥づかしい気持ちでしたし……。

——「おかゆさん」を食べてるといふようなことを他の人に言うのと、いけないというか、恥づかしいというか、そういう気持ちがあつたんですか。他の人に言つてはいけないと、お父さんやお母さんから言われていた？

坂本 そういふのじゃなくて、なんとなく、いつからか、やっぱりここ（の部落）にしかないもんだということがなんとなく分かつていましたから。だから、そういういろんなことで、ここ（の部落）は違うなという感じを持つてました。で、小学校六年生ぐらいになつてから、友だちが「ここ（の部落）は同和地区なんだつてえ」と言うのを聞いて、その時に初めて「同和」という言葉を知りました。

——小学校六年生というと、（昭和）四十四、五年になるんかな。

坂本 そうですね。「それで、なんか差別されているんだつてえ」みたいな話があつて、で、校長先生ところへ聞きに行つたんです。友だち四人で、同級生の女の子ばかり。なんで、ここ（の部落）が差別されるんだということが全然分からなかつたから、誰にも聞いたことがなかつたから。で、校長室で話したんですけど、その時に先生が……ここに太閤秀吉にまつわる話がありますね。

「ここ（の部落）の人がその時にその人を助けたから、それで年貢を納めなくてもいいつていうことになつて、まわりの人から逆差別みたいに、恨まれて、差別が起つたんだ」といふうに、その時は教えられたんです。なんにも知らないから、そうかいなあと思つたんですけど。

——さっき言つてたけど、小学校の時に悪いことをするの
のはみんなここの部落の子もだったということでは
すけど、悪いことってどんなことなんでしょうか。

坂本 いたずら程度ですけどね。やっぱりそういうこと
がありました。今考えてみると、その時はそう思わなかつ
たけど、ここの部落)のグループとして一括して叱られ
ていたみたい。「(どこそここの部落の)男の子たちは……」
というふうだね。

で、さっきの「おかゆさん」の話になりますけど、よ
く先生が、女の先生でしたけど……五年生ぐらいの時に
ここ(の部落)の男の子で一人声が小さいんですけど、
発表する時なんか。そしたら、その女の先生がしよつち
ゆう「朝、おかゆさん」食べてきたから、そんな声しか
出れへんのやろう」と、そういうふうに言われて、その
頃からやっぱり「おかゆさん」いうもんを卑下するよう
になりました。やっぱりそういうことがあったからだと
思いますけど。

——あッ、女の先生がそう言いはった？ ハア。

坂本 はい。よく言つてました、それは。

——どういふことなかなあ。やっぱり嘲笑ぎみなんかな。
な。

坂本 そうですね。他の地区の子は「おかゆさん」なん

て知らないでしょう。その当時、私ところは実際「おか
ゆさん」を食べてましたよ。毎日毎日じゃないですけど。
それからさっきの「悪いことする」いうのは、登下校の
時なんか……ここはとて(学校に)遠いんです、三
キロありますから。他の地区はそうじゃなくてすぐ近
くに(学校が)ありますけど。ここだけが遠いんで、や
っぱり三キロも歩くと、子どもの足で一時間ほどでした
けど、歩いてるとノドも乾くし、そうすると、みんな散
らばつて道草したり、そういうことがやっぱり原因じゃ
ないかと思うんですけどね。

ちゃんと勉強していけば差別されないと考えた

——お父さん、お母さんから部落のことを聞いたのはい
つごろ？

坂本 聞いたというのか、そのことについて話したのが
中学の二年か三年ぐらいだったと思います。

——それはあなたの方から聞いたんですか。

坂本 どっちからいうこともなかったように思いますけど。
姉もいるんですけど、家族でなんとなくそういう話
になりました。

——おじいさん、おばあさんからなにか聞いたことがあ
りますか。



奈良県水平社の小作争議講助援(1926年)

坂本 いえ、うちはおじいさん、おばあさんがいなかったから、直接に聞くことはなかった。

——お父さん、お母さんと話したときの、話の中味なんかもう覚えていませんか。

坂本 うーん。やっぱり、昔(家に)上がってご飯を食べさせてもらえなかったとか、お菓子を他の人と違うもらい方をしたとか、そういうこととか……あんまり覚えてませんけど。

——お菓子の話なんですけど、お菓子のもらい方が違うというのは、どういうことなんやろうね。

坂本 ある家に遊びに行ったら、他の子はその場で手に

受けてもらえるんだけど、うちのお父さんらは紙に包んだものを「うちに帰って食べなさい」と言われて、そこで手では受けなかったと言っていました。

——そういう形で、お父さん、お母さんから部落のことについて聞いたんやろうか。

坂本 そうですね。

——中学校へ入ってから同和教育を受けた経験がありますか。小学校の時はどうでした？

坂本 小学校の時は「道徳」という形で習いました。でも、部落のこととか全然聞いてません。あのう、障害者とかそういう差別のこととか、男女差別のこととか、それぐらいのことでした。部落差別のことは全然(授業に)出てきません。中学校の時も部落差別のことは全くなかった。アイヌとか、朝鮮人のこととかが時々でてきましたけど。一応『友だち』という(副読)本を教科書に使ってやっていて、それにそういう話が載っていて、それにもとづいてやっていったから。

——その『友だち』には部落問題のことは書かれてなかったんやろうか。それとも授業では取り上げられなかったんやろうか。

坂本 『破戒』かなんかが出てきたんかね。あんまり(記憶)ありません)。ちょうどその(昭和四十八年)ころ、わ

たしらが（中学）三年のころ、解放運動が盛んになってきて、部落で「若あゆ学級」をやっていました。ここで「若あゆ学級」いう解放学級をやっていて、最初は、そこで国語とか数学の授業を教えてもらっていました。補習授業のような形だったんです。それから、三年になって、学校の「道徳」の時間に、みんなにアンケート用紙を配って、「この近くにある部落いとか同和地区の地名を知っていたら書きなさい」というのがあって、そういうのがあってからか、「若あゆ学級」でそういう問題についてちょっと、話に出たくらい。わたしはその時ここ（の部落）の名前を書かなかつたんですけれど。

——どこの名前を書きました？

坂本　へどこそこの部落の（名前）を書きました。やっぱりなんとなく嫌だったんです、その時は……。

——その調査は中学生を対象にして行なったんだわね。アンケートの内容としては、「知っている部落の名前を書きなさい」以外に、どんな項目がありましたか。

坂本　それだけだったんです。まあ、紙を配って、書いて出すだけだったんです。

——ふーん。その調査をやったあと、それに関連して先生がなにか指導しましたか。

坂本　そのちよつと後に、ここ（の部落）の名前を出し

たかどうか分かりませんが、「部落というのがある」みたいなそういう話があったように思います。一時間だったか、二時間だったか、もう卒業前でしたけど。

——それは部落はどうして作られたかという歴史みたいな話なんですか。

坂本　そうですね。土農工商から始まって、その程度なんです。ですから、あんまり記憶にないんです。で、自分でもここは部落だと知っていたし、（部落が）差別されるのはやっぱり言葉が汚かったり、まあ、それなりの要素が（部落に）あると思っていたので、自分さえちゃんと勉強して差別されないような人間になれば差別されないと、そのころは思っていたので、あまり印象にないんです。あまり真剣には考えなかったし。

——他の人たちはどんな所を書きましたんやろうね。

坂本　さあ。でもみんな知ってると思っていました。

——養父町の（どこそこの）部落へ行った時にね、あそこの中学校では、中学校の教師は親に責任を押しつけるようにして同和教育をやらないうのですから、親が自分の子どもに「あなたは部落や」という顕現学習をわりと早くにやっていますけれど、そういう指導は中学校ではなかったですか。部落はこういうものだという指導だけははったんやろうか。

坂本 ほんのちよつとだけ(ここの)名前程度を出したと思っ
て思っんです。でも、もう本当に卒業前で、一時間か二時
間ぐらいでしたから、ほとんどやっつてないも同然みたい
でした。

— 中学校で解放研ができてくるのはもうちよつとあと
ですか。

坂本 そうです。わたしが卒業(昭和四十九年三月)し
てからです。

— そうしたら、中学校を通じて部落問題の關係で指導
を受けたというのは、さつき聞いた「部落の地名を
書きなさい」というアンケートのあと、一時間か二

時間部落の歴史みたいなことを聞いたぐらいですか。

坂本 そうです。そのころに家の人と話したんで、そう
いう形で考えた方が大きかった。学校での記憶はほとん
どないんです。

— お父さん、お母さんとの話は一回きりじゃなくて、
何回かにわたつて話を聞いたとか、自分から話した
りとかしたんですか。

坂本 そうです。やっぱり(わたしと)同じで、部落に
も悪いところがあるんだいう考え方があったみたいです。

— そのお菓子の話を聞いて、違った扱い方を子ども
の時に受けたという話を聞いて、その時の感じはどう

でしたか。

坂本 すごいひどいことをされたなあという気持ちと、
昔のことだろうという気持ちと(がありました)。

— 小学校、中学校を通じてね、差別をされたという体
験がありますか。

坂本 さつきの「おかゆさん」食べてるから元気がない
んだ」と、そういう言葉を聞いたのとか……。やっぱり
自分も食べてるからズキツときますしね。あとは、養父
市場の女の子と仲が良くて、成績の方もわたしもその子
もわりと良かったんです。で、二人で先生ところへ行つ
たりすると……成績とかそういうことでは、わたしは負
けない自信があったんです、まあ、おんなじぐらいだろ
うという……。二人おいといて、(先生から)家のこととか、
お父さん、お母さんのことですごく比較されてね。すご
う、くやしい思いをしたことがあったんですけどね。な
んかこう、(その子の)家の造りが上品だとか、こう気品
があるみたいなこととか、その子のお父さんは郵便局に
勤めていて立派だとか、二人並べといてすごく(友だち
の方を)持ち上げるんですね。隣にいるわたしはなんか
こう、すごくそういうのを感じました。

— そう。いっしょにおつたわけやね。男の先生?

坂本 いえ、女の先生。さつきの「おかゆさん」のこと

を言った先生です。なんていうのか、わたしもその子に負けたくないという気持ちがあったしね。いまだに（記憶に）残ってます。

それは先生が「遊びに来なさい」ということで、二人を自分の家と呼んだわけですか。

坂本 いえ、なんかの用事があって、行ったりすると…。小学校の五年生か六年生の時のことです。

わりとその先生は徹底して差別しているんやね。

坂本 そうですね。

五十歳以上ぐらいの部落の人に聞くと、同級生からひどいことをされたという話を聞いたりするわけやね。この前、関宮町の（どこそこの部落の）人に聞くと、小学校の時に講堂の所でボンヤリ立っている、後ろからいきなりどづき倒されて、えらい怪我をしたという話をしました。同級生からなんかずいぶん差別的な扱いを受けたということはもうありませんでしたか。

坂本 ないですね。

ここの部落の子どもだけでかたまって遊んでいて、他の地区の子どもといっしょに遊ばなかったということもなかったですか。

坂本 そういうこともなかったですね。



第5回京都市水産大会(1926年11月15日)

— 今、小学校の女の先生の話にできましたけど、他の先生方はどうやったんやろうか？ そんなひどい先生はいなかったんですか。

坂本 その先生が一番印象に残ってます。

八鹿高校の同和教育は現実ばなれ

— していると思つた

— 八鹿高校に入学したのはいつでしたか。

坂本 (昭和)四十九年四月です。

— 入った時にはもう解放研(部落解放研究会)はできてましたか。

坂本 いえ、まだできてませんでした。わたしが(解放研に)入ったのは九月、夏休みあけでしたけど、できたのが六月か七月でしたね。

— 解放研に入るまでに、八鹿高校でなんか部落問題に関する話を聞いたとか、映画を見たとか、ホームルームで話し合いをしたとか、そんな同和教育はありましたか。

坂本 ええっと、一応「同和教育」という時間はあったんですけど、歴史とかそういうものしかやってなくてえ。で、担任は林(総介)という教師だったんですけど……。そのころちやうど部落のなかでも、解放運動が高まって

きたころだったんです。で、確認会とか糾弾会とかにわたしてもそのころから始めて、そういうのを見てましたから、「同和教育」いうて、歴史とかそういうものを教科書使つてやっているのが、すごくなんか現実ばなれしているように感じました。

で、確認会とか糾弾会というのは、すごく実態が出るでしょう。自分の受けてきた差別とか、今の部落の状況とか……。そういうのを全く抜きにしてね、実際に八鹿高校の近くにも部落はいっぱいあるし、クラスの間でもわたしと二、三人部落の生徒がいましたけど、そういう生徒がいるのに、実際の問題には全然ふれないんですね。で、「同和教育をするに当たって」という話の時に、「歴史と科学的なとか(：科学的認識のことか)というのが大事なんであつて、それをやる」というふうに言われたんです。わたしは「歴史をやるのもいいし、科学的なとかいうのをやるのもいいけど、そのなかにやっぱり今の実際の(部落の)問題とか、近くにある生の実態も同時にやっていくべきではないか」と発言したんですけど、その時全く無視されてね。授業中にそう言ったんですけど、全然無視で、なんの答えもなしにそのまま授業をすすめていきました。

— 「科学的認識」と言う場合、よく分からないのだけど、

部落の人が受けた差別の体験とか怒りとか、そういう気持ちなんかは「科学的」のなかに入らへんという考え方と違うかな。

坂本　そうですね。その時にちょうどここ(の部落)で分村独立の運動をやっていた時で、水の問題とか……あのう、水の権利がまだこつちにはなくて、なんか土地はこつちのもんだけど、水が引けないから、実際にはここ(の部落)が本当の意味で独立してないと言っていて、お父さんらが運動してた時だから、そういう話を(担任に)しに行っただけですね。「今うち(の部落)ではこういうことをやっているんだ」ということを、ピラとか資料を持って。それは解放研に入る前の話ですけど。ピラって、ここの支部が作ったピラなんです。小さな半ペラのもんですけど。職員室へ行って(担任の)先生とそのことについていろいろと話して……「今こういう問題があつて、本当に人間の解放ということ、うちの部落ではこういうことをやっている。そういう学習会に先生も一回来て下さい」と話したんですけど、「わたしは絶対に行かない」って。「学習会ですから、誰が行つてもいいから、先生も一回聞くだけでいいから来て下さい」と言つたんですけど、その話になると、先生がそこまでかたくなに断るといふのは、すごく不思議でした。

——それは五月か、夏休みに入る前のことですか。
坂本　五月ぐらい、入学してすぐでした。

——あなたが確認会、糾弾会に出たのは、中学校卒業までのこと、それともやっぱり八鹿高校へ入ってからのこと？

坂本　卒業後だと思ふんです。三月に卒業してすぐぐらしか、四月ぐらいかでした。

——最初に出た確認会でどんなことを議論していたか覚えてますか。

坂本　もう忘れてしまいました。あのころ、バタバタと(確認会や糾弾会に)出ましたから……。

——他の町で行われた確認会や糾弾会に出られたのはなくて、ここの部落であつたものに出られたんですか。

坂本　ここ(の部落)では、確認会、糾弾会を始めたのはだいぶ遅かつたと思ふんです。でも、夏休み前にはあつたと思ふんです。中学校の先生の確認会とかが学校であつたり、ここの集会所であつたりしましたけど。何回も、もう毎週ありましたから。

——初めのこの出た確認会とか糾弾会は他の町で行われたものですか。

坂本　はい、そうです。ええつと、関宮町とか、朝来町

とかへ、お父さんとか部落の人とか青年部の人といつしよに出かけました。青年部はできはじめてましたから。

——印象に残っている確認会、糾弾会にはどういふのがありますか。具体的に、どういう問題で、どういふ点が印象に残っているとかな……。

坂本　もう、とぎれとぎれでね。あのう、関宮町の確認会でね、(中瀬鉱山の労組幹部の)「えたのしし分け」といふあの時のこととか、やっぱりうちの地元の確認会で、自分が教えてもらった中学校の先生が「穀つぶし」と言われたこととか。やっぱり丸尾(良昭)さんが来てましたから、なんか先生にいろいろ確認やつてる最中に、「今までになにをやつてきたか」とか追及している時に、丸尾さんが先生に「穀つぶし」と言つたんですね。それになにか校長にたいして言つたわけではないのに、教頭が校長に向かつて言つたと記憶していて、「かりにも一校の校長にたいして「穀つぶし」とは何だノ」といふふうに言い返したんです。そしたら、丸尾さんが「部落の子どもにたいしてだけではなしにちゃんとした教育ができていないのに、仕事してなくて給料もらつてるから、「穀つぶし」なんだよ。ちゃんとした教育をしてない先生に向かつて「穀つぶし」と言つて、なにが悪い」といふ、そういうやりとりとか、その時その時の先生の答えがなん

といふのか……目の前でね、先生が全然こつちの気持ちを理解してないと分かつた時には、そういう先生に今まで教えてもらつていたんかと、すごく腹が立つた。やっぱり確認会、糾弾会でやつとこういうのが差別なんだと分かると同時に、自分がね、すごく腹が立つのは、あいうことは初めてでした。本当に腹が立つ、自分が差別を受けてるいふことがはっきりして……。

それまでは、さっきも言いましたように、小学校の時も中学校の時も、そういう扱ひいふのを、明らかに(差別だと分かる)扱ひを受けてないでしょう。だから、その当時は自分で一生懸命勉強して、がんばつてなんにも言われないような人間になれば、差別もされないだろうといふ気持ちでいたんですね。まあ、他の人はどうでもいふという気持ちだったんですけど。やっぱりその時に目の前でそういうのを見ると、もうなんというか、自分が(差別に)気づくといふのかね。その時にやつと腹が立ついふのかね。それまでの同和教育とかでは、それが分からなかつたから、今どういふ差別があるのかいふこと(分からなかつた)。

——部落の歴史だけを習っているから、現実には自分がおかれてゐる立場と結びつかへんといふところがあつた？

1月6日 - 12日 日 三 三 三



『水平新聞』第2次第20号
(1928年1月1日)より

坂本　そうです。やっぱり確認会とかやっているとね、先生とかの観念のなかに差別があるんだというのが分かるでしょう。普段、口に出したり、露骨には言わないし、しないけれども、そういうのが差別なんだと分かると。それと、いままでこういう先生に教えてもらっていたというのにすごく腹が立ってね。

— あのう、この話だったかな。小学校の生徒が先生といっしょに学習会だったか確認会だったか持った時に、生徒の方から先生に質問はったのかな。で、「校長先生がわたしと同じように部落の人やつたら、校長先生はどうしますか」ということを小学校の五

年か六年の女の子が質問した。そうすると、校長先生は「私だったら死んでしまいます」と答えたというのは、たしかここ（の部落）だったように思うんですけど。

坂本　あのう、わたしも多分その時に行つてたと思います。

— 確認会、糾弾会というのは、部落の人にとっては簡単にいうと学習の場だったというのか、いままで分かんなかったことがパツと分かってきた、そういう場だったと聞くんですけど、あなたの話を聞いても、そういうことですね。

坂本　そうです。自分が変わったということですね。

— 勉強して負けないようにすればいいんだという考え方から、部落問題そのものに取り組んでいかんとあかんという気持ちになったのは、確認会、糾弾会に出席するなからずと変わってきたのかな。

坂本　そうですね。そういう時に、いままでの同和教育でこんな気持ちになったことはないと思いました。

— 他人のことを聞いてなんだけど、あなたの同級生なんかはどうだったんやろうね。確認会、糾弾会に出席して、どういう感じだったのか話したことはありますか。

坂本 わたしの同級生はこの部落の子だったら、ほとんど一回や二回出席しとると思います。

——解放研に入るまでに参加した確認会、糾弾会のこと
を聞いているんだけど、他に記憶に残ってるようなことはありませんか。

坂本 とぎれとぎれにしか覚えていないんだけど、山田久の(差別文書)確認会とか……。具体的にはあまり覚えてないんですけど、あとは広谷小学校とか、いろんな小学校とか中学校の確認会とか(に参加しました)。

——あなたの場合は、八鹿高校の解放研に入る前にもう青年部に入っていたんやろうか。

坂本 どっちが先だったかな。ここの青年部はそんなに早く(出来)なかったから。早くからやってた人も一人や二人いたみたいですけど、部落のなかで青年部を作ったのはだいぶ後で、解放研(に入ったの)と同じぐらいの時期だったと思うんです。九月ぐらいだと思います。

堂々と発言できるようにになりたい

——あなたが解放研に入ったのは九月と言っていましたけど、入ったのは勧誘されたからやろうか。

坂本 いえ。そういうことはなかったんですけど。わたしは解放研ができることは全然知らなかったんです。

まあ、担任ともそういうふうに話しても、全然こう相手にされなかったんで……。もう一人養父町の(どこそこ)部落の男の子が同級生にいて、その子がちょっと早く入っていたんです。で、砂原君というんですけど、その砂原君と「林先生がこう言った」とか「今の同和教育はどうだ」とか、そういうことをチョコチョコ話してたんです。その時に「解放研ができるんやで」ということで、家に帰っていろいろ話したり、家の人も確認会とかに出てましたから、いろいろ話してて、そしたら「入ってみようか」ということになって、それで入ったわけです。

——部落研(部落問題研究会)のことはどうでしたか。
坂本 部落研があることは知ってました。解放研に入るまでに部落研のことはいろいろと聞いていたんですけど、だいたいこういうもんだと。

——部落研に入るように先生からすすめられたことはありませんでしたか。もうすすめても、とつてもダメという感じでしたか。

坂本 いえ、もう。最初からその話は分かっていたみたいで、向こうも。まあ、「確認会、糾弾会にも出てます」と(わたしが先生に)言うてたし、「うちの家族もみんなやってる」と言うてましたから。林という教師とずつと話してる時に、わたしが確認会、糾弾会に出て、自分で「こ

れだッ」とすぐく思ったんで、先生にそういうのを話したんです。「こうこう、こうだったんだ」と。そして「先生も一回出てみるといいって。これが差別なんだというのが目の前で分かるんだから。どんな本を読むより、わたしにはずっと良かった」と話して、「で、一回出てみる」といい」と話したんです。そうしたら、「そういうところには絶対に出ません」と言つて、そういうやりとりがあつてから、家庭訪問があつたんです。わたしがいつもそういうふうにしやべっているし、父がその林先生と話したいというんで、「家庭訪問の時に父が話したいと言うんで、なんとかちよつとおおめに時間を取つて下さい」と先生に話したんです。そしたら、先生が「行くのはいいんですけど、話すのはわたしと父と先生と三人だけにして下さい」とすぐく念を押されてね。どういう意味かと思つて、すぐくおかしかった。

——先生はもう先入観を持つていたんだわ。

坂本 そうですね。「絶対に三人にして下さい」つてえ。なんかね、こつちはね、家庭訪問ですからね。

——三人で話した時には、どういう話をしてましたか。
坂本 その時は、父がこういろいろとここの部落の状態とかそういうことを話しているんだけど、先生はもううなづくばかりで、返事もなんにもしないし、反論もし

ないしね。

——先生はただ時間の過ぎるのを耐えてはったのかな。話が変わるけど、解放研へは九月になつてから入つて、そこで中心になつてたのは三年でしたか、二年生でしたか。

坂本 その時に、中心になつてたのは……、まあ、一年、二年、三年ともわりとみんながんばつてみたいでした。林田さんが三年生で、砂原のり子さんが二年生で、あと一年生が丸尾さんという人とか中川さんとか(おりました)。
——その時のメンバーは何人ぐらいおりました？

坂本 十何人だったかな、そんなにいなかったかなあ。十人ぐらいだったかな。

——あなたが入つた時の解放研の日常的な活動としてどんなことをやりましたか。南但地協(の事務所)で見たら、当時のピラが何枚か残つていてね。

坂本 あのう、山田久の事件とか……(差別された八鹿高校生の)妹さんもおりましたし。ああいう問題について書いたピラを出したり、あとはやっぱりクラブとして認めてもらうのに顧問を探していたり、そういう呼びかけみたいなことをやつたりとか……。

——ピラを書いて、主として訴える対象は八鹿高校の生徒になりますね。で、どういう具合にピラを配つて

書評編集委員 募集 !!



『書評』を自分の手で
創ってみませんか？

☆雑誌の編集に興味のある方。

☆思想・文化運動をやってみたいと思う方。

お気軽に編集委員まで。

・連絡先 生協本館3F・組織部内

☎ 38719998 (直通)

☎ 38811121 (内線4821)

いって、ピラを受け取った生徒の反応はどうだった
んやろうね。

坂本 反応はなかったような(ことでした)。ピラは校門
のあたりで配ってました。でも生徒としたり、その時点
ではまだ反対もしないしね。

——先生方の反応はどうやったのやろうね。解放研のア
ピールにたいしては……。

坂本 無視だったです。自分たちは(解放研を)認めて
ないからいうんで、最初から見向きもしなかったし……。

——「関係ない」という感じだったんですか。
坂本 そうです。

——解放研の考え方は一口では言われへんやろうけれど
も、だいたいの活動方針というか、なぜ解放研をや
っていくのかということ、みんなて話し合ってた
まったような目標とか考え方がいくつかりました
か。

坂本 やっぱみんな同和教育にしても普通の授業にし
ても、こう発言できるというかね、堂々と。そのころの
同和教育だったら、(部落の子が)発言できないか、小さ
くなってるか、わたしがしたみたいに、言えば無視され
るか、なんていうのか、(部落の生徒が)いてもいなくて
もいいわという同和教育をなくそうみたいなことでした。

やっぱりものが言えて、その当時のままの同和教育じゃなくて、解放、差別をなくす方向に向かう生徒が意欲を持てる教育にしていこうということで、先生にも働きかけたり、そういうことをしていこうというのが目的だったです。それで、同和教育もそうだし、授業が分からなかったりして、分かる授業にしてみよう……。

——先生は誰が部落の生徒だと分かっていたんでしょうね。そういう部落の生徒に働きかけてきて、どういう具合に自分が考えているとか、やっていくべきだとかを念頭において指導していくとか教育していくとか、そういうことは全くなかったんやろうか。言っただけはねつけるばかりだった？

坂本 わたし、林先生には全然（そういう態度を）感じませんでした。もう全然相手にされなかつた。

——無視しているというのは、なんか警戒して、恐れて、それで無視しているということやつたんやろうかね。

坂本 でも、最初はね、その話するまでは、そういうこととはなかつたと思うんですけど。さつき言つたように、「授業のなかに」実態がないじゃないか。（部落の）実態もかねて講義していかなあかんのやないか」と言つても、その時にみんなの前でわたしが言つたんですけど、その時から無視されだしたんです。それ以降ずっと……。

——職員室なんかへ行って話したことは？

坂本 そのあと、わたしが行ったんです。話は最初「うん、うん」と聞いているんですけど、そのう、話が確認会とか糾弾会とか話し合いとか、そういうことになるとう、もう全然話を聞いてくれなかつたんです。

——八鹿高校の先生方はだいたい林先生みたいな考え方とか姿勢の人が多かつたんですか。

坂本 多かつたんじゃないですか。結局、解放研が話し合いを要求した時も、その林先生とおんなじように無視で、全然「話し合いとかは個人では受けられません、職員会議にかけないと受けられません」と、そういうところがおんなじ心理なんじゃないですか。

——「職員会議にかけないとダメだ」と、最初から言いまして？

坂本 そうですね。で、（高本先生が）「個人で会う」と一旦は言つたんですけど、約束は破られましたね。「やっぱりダメ」ということで。

段々と先生の態度が露骨になってきた

——九月に（解放研に）入って、秋にかけての日常的な活動はピラを配つたり、学校に話し合いを求めたり、生徒に訴えたりとか、そういうことをしていたんで

すか。

坂本 そうですね。まあ、放課後は解放研のなかで話し合ったりする時間も結構ありました。

——九月以降十一月にかけて印象に残っている活動はなにかありますか。

坂本 一つも一つもピラ書いていたぐらいで。文化祭の時に、抗議文みたいなものを廊下とかに貼ったんですけど。学校にたいして同和教育をちゃんとしろという抗議文とか、垂れ幕とかも掛けたんですけど、それも取られたり、はがされたりして……。

——それは先生がやったのか、生徒がやったのか、分かれへん？

坂本 そうですね。多分、先生だったと……。抗議に行ったら、「自治会の判がない」というものを掲示してはいけない」ということで。だからといって、(解放研は)クラブじゃないから、またそういう(許可)はおれないし。そういうやりとりがあったり、垂れ幕なんかはがされてしまうから、また夜に学校に残って書いて上げるとかしました。布に、こう横書きで作ったんです。

——どんなスローガンを書きましたか。

坂本 いやあ、覚えてません。まあ、「解放研を認めてくれ」とか……抗議文にはそういう文章があったと思いま

す。あのう、一泊研修会から解放研ができた経過とか書いてあったように思います。それから、ピラも配って狭

山事件の署名取ったりとか、そういうこともやりました。

——先生の姿勢は最後まで変わりませんでしたか。それとも時が経つにつれて、ますますきびしくなったというか、ますます対立的になってきましたのか。

坂本 そうですね、文化祭のころはまだ無視した姿勢が多かったし、まあ表面に出てこなかったんです。だいた自治会の許可がないからダメだとか、そういう程度でした。そういう程度でしたけど、段々もう先生が露骨になって……。

——文化祭というと、いつごろのこと？

坂本 十月の終わりころだったかな。

——先生の態度が露骨になってきたというと、具体的にほんなんふうでしたか。

坂本 やっぱり顧問の問題にしても「顧問がいなくてクラブとして認めない」というので、「とにかく顧問を探そう」ということで、いろんな先生に当たってね。解放研の生徒が職員室の先生とこへ話に行ったら、そうすると、なんていうのか警戒しちゃってね。最初はある程度話できたんですけど、段々と、(糾弾)闘争の前がそうでしたけど、一人の先生と話しているとみんな(先生

が)ワァッと囲んできたり、なんでこんなに大騒ぎせん
なあかんのかなとこっちは思いましたけどね。ただ生徒
が話に行つとるだけなの。

——八鹿高校の先生で解放研の生徒たちと積極的に話し
てみようという先生は全くなかったわけですか。職
員室ではダメだとしても、非公式にでも話してみよ
うとかね、そんな先生は全くだせんでしたか。

坂本 (十一月二十二日の)闘争までは全くなかったで
す。それから後は、職業科の先生が(解放研部屋に)時
々顔を出していたような気がするけど。でも、どうい
う考えを持っているんか、もうひとつはつきり分からな
かった。

——坂本さんはハンストに参加しはった?
坂本 はい。

——そのハンストやってまでもやらんとあかと思うよ
うになったその時の考え方、気持ちはどうだったんや
ろうね。ハンストの前後の事情も含めて話してもら
えますか。

坂本 あのう、座り込みした時にね、座り込みしたのが
月曜日(十一月十八日)やけど。その座り込みになった
というのは十六日の土曜日にね、先生がスクラム組んで
帰っちゃったという、あの時にもう……もうスクラム組

んでね、ものすごい血相変えて、もう本当に鬼みたいな
顔してね、いつもこう見えている先生が、目の前で……。
わたしら止めに入っても突き飛ばされるしね。そういう
状態で帰っちゃうんで、その時に「こんな先生の授業な
んか受けられへん」と思いましたし。それで、あのう、
座り込みしたんですけど、十八日から。日曜日はさんで、
月曜日から。十八日から座り込み始めといて、教室に入
って行って生徒に呼びかけたり、なんでこういうことにな
ったかと話したり、先生にも休み時間とかに声かけて
話しようとしても全然……。それぞれみんな担任とか
よく知ってる先生とかに行きましたので、わたしは担任
とところに話かけしても、全然返事もしないんですね。「先
生」とこう顔見て言つたつて、知らん顔して、スタスタ、
スタスタ行っちゃうという感じで。

もう(先生と)話もできないし……まあ、クラスに行
つたら「受験勉強の邪魔になるから出て行ってくれッ」
と言う生徒もいたり、で「八鹿高校の同和教育のこうい
うところが間違ってる」とかさういうことを話しても、
他の人の話ですけど、他の生徒は「じゃあ、なんであ
んたはここの学校に来たんだ。止めればいい」と言われた
りね。「この学校で勉強することはない」つて、そういう
ふうにならね。



岡山県久米郡厚生小学校糾弾闘争
(1930年)

もう教師は全然、目の前を通り過ぎてても、なんにも言わないし。もう朝晩スクラム組んでね、リュックサックかなんかを背負って、もうなんか、こつちがびっくりするような、なんか戦争みたいな感じだね。団体で行動を起こして、歌うたいながら……もう、これじゃ話し合ってもできないし……やっぱり座り込みに入る時の気持ちとおんなじような、まあ、すごく高ぶっていたものがあるけども、これじゃ、もうどうしようもないという感じでした。で、いくら話し合おうとしても、「六月の時点に戻せ」っていうふうにしかならないし。

——「六月の時点」というと？

坂本 校長と教頭が解放研を認める決定をした以前（の六月）に戻せということです。

——その時に先生と話し合おうとした主な問題はどんなことでしたか。

坂本 その時は「（解放研と）話し合いすること」と「（解放研に）顧問をつけること」と、それから「解放に向かう同和教育をすること」の三つでした。

——ハンストは何日から？

坂本 ええつと、（十一月の）二十一日でした。木曜日でした。土、日が祝日、日曜と続いていったんです。

先生がにくいという気持ちだけ

——座り込み前後というと、先生方は全く集団で統一した行動をとって、なんというか、もう敵対して、戦闘体制みたいな感じだったんですか。

坂本 そうです、もう……。校歌うたったり、労働歌うたったり、インターナショナルとか「がんばろう」とかうたっていました。

——その時の先生にたいして気持ちを持たれたと思うんですけど、どういう気持ちだったんやろうね。

坂本 もう、にくいいうかね。座り込みをすれば、それなりのなんかあると思ってきましたから。

——その期待は全く裏切られた形ですね。

坂本 そうですね。でも生徒がたくさん座り込みに参加してくれました。あれは成果だったと思うんです。

——かなりたくさんの生徒が入れかわり立ちかわり？

それとも同じメンバーが？

坂本 もう同じメンバーがずっと……授業もポイントとして、座り込みしてくれた。五十人ぐらいたったと思います。

——先生が戦闘体制みたいな形で、集団で登下校していたが、そのなかで話し合いを求めて、ある程度先生の姿勢が変わるんじゃないかいう、そういう期待もあつたわけですか。

坂本 まあ、一部の先生でもやっぱり……。全く向こう向いちやつてる先生はダメだと思つたけども、なかには賛成してくれる先生もいると思つてましたからね。

——結果は、座り込んでいる(職員室の前の)廊下に来て、いろいろと話しかけてきたりとか、様子を見に来てくれた先生というのはあつたんですか。もう全くなかつたんですか。

坂本 なかつたです。いや、もう先生のなかでももの言えなかつたんじゃないかと思うぐらい。後で考えたり、いろいろ聞くとね、「なんにも言えなかつた」とかね。あ

る程度理解しようとしてくれる先生もいたみたいですけど。

——実際に座り込んでいる生徒の所へ来て話してくれるとかいう先生は全くなかつたんですね。そのなり込んでいる生徒の所へ来て、認めた責任上にかするということはなかつたんですか。

坂本 そうですね。それと普通科でも一クラスあります。わたしともう一人が呼びかけに入つて、いろいろ話していると、みんなダァツと立つて、外に出ちゃったんですね。一人だけ残つて、先生とその生徒と二人だけになつたんですけど、先生ももう止めないし、知らん顔で、二人だけで授業やりました。外に出た生徒には別に「戻つて来い」ともなんにも言わずに……。音楽の授業だつたと思うんですけどね。外に出た生徒は帰る時間までいっしょに座り込みしてくれました。

——校長先生、教頭先生は解放研をクラブとして認めたわけでしょう。その時に、校長先生や教頭先生は座り込んでいる生徒の所へ来て、認めた責任上にかするということはなかつたんですか。

坂本 職員会議とかで、なんかやっぱりやっていたみたいです、他の先生と。でも、校長先生はあんまり知らなかつたけども、教頭先生はしよつちゅう来て、あのう、

いっしょにやってみました。

——励ましたりとか？

坂本 そうです。まあ、「どうだ」とか……。教頭先生が（解放研の）顧問みたいな形でした。

——その座り込んで、ハンストしてから後はどうでしたか。解放研にたいする先生方の対応だとか、他の生徒の反応だとかは、二十二日の糾弾闘争のあと、どうでしたか。

坂本 いやあ、もう、先生は冷たい目でした、もう。あの片山（正敏）とかね、廊下なんかで顔合わしても、ものすごい嫌な笑いというか、笑うか、嫌な笑いをするか、にらむかだね。他の生徒には分からなかったと思うんですけど、当人（わたし）はもう嫌な感じでした。みんなそれは感じてたと思うんです、解放研の生徒は。

——部落のお母さんに聞いた話では、片山先生らは部落のなかに入ってきて、学習会に参加してきていたのに、支部が結成されて解放同盟に入ると、途端にもう来なくなつたと。その時に顔見知りになつたお母さんが座り込み最中に八鹿高校に行ったら、片山先生がニヤリと笑つたとか、それは冷たい目で見えたか、そういうことを言つてはつたね。それは片山先生あたりがそうであつて、他の先生方はどうでしたか。

坂本 他の先生もおんなじです。もう、やっぱり特別な

目で見てるとというのが、授業中でも分かる。もう全く無視か、無視というか、避けてね、かわり合いにならないというのがありありと分かつた。どの先生もそうでした。

——そうしたなかで解放研の活動はやっぱりピラをまいたりとか、クラスへ入つて訴えたりとかずつとやりましたか。

坂本 ずつとやりました。

——そのころのピラの内容は？

坂本 やっぱり闘争のことが主でした。——なんで座り込みをやつたとか、ハンストをやつたと



か、そういうこと？

坂本　そういうこととか、その後の経過が主だったと思います。教師もその後授業中にね、「ここを殴られた」とか、なんか「タバコの火付けられた」とか言っていましたし。

——それは教室で？　部落の子どもがおろうと、おるまいと。

坂本　はい。すごく同情をかうような言い方でした。なんか「自分は暴力に弱くて、喧嘩が弱い」とかね。そういう言い方でした。

ハリスト以降の方が大変でした

——他の生徒の反応はどうでした？

坂本　他の生徒も、まあ暴力ということしか言わなかった。まあ、あの（事件の）あと、「同和教育」の時間とかで、「こうこう、こういうことだったんだ」と言うんですけど、やっぱり暴力ということをまず最初に持ち出してきて……。

——それから、八鹿高校の同和教育が闘争の前と違って変わった点はありましたか、良くも悪くも。

坂本　あのあと、同和教育はほとんどなかったと思います。入学した時には、月に一回ぐらいありましたけど。二年の時の担任が闘争のあとにずうっと遠いところから

来た先生で、その先生はわりと理解してくれて、いろいろと話もしたんですけど。もうそれまでの先生とは全然……わたしも違うと思っていたし（話しなかった）。「同和教育」の時間に、どうしてもその闘争の話になりますね。他の生徒も、「暴力があつたかかったか」とか、「解放同盟というのはどういうもんなのか」という疑問が出たりして、その先生はわたしにほとんどしゃべらしてくれなかったから、言いたいことも言えたり、他の生徒とも一応話してきました。

——高校を卒業するまでで、印象に残っていることがなにかありますか。

坂本　それからは、もうなんていうのか、特別扱いではなかったから、教室のなかでもいたくなかったし、教師は今でもにくたらしいと思っているから、そのころは全然話したこともないし。まあ、あの当時の先生は嫌いです。ほかの解放研の生徒もみんなおんなじ気持ちだと思います。

——解放研のなかで、その後八鹿闘争について話し合うことはありましたか。

坂本　それはもうキチツとやってみました。

——解放研のなかでは八鹿高校の同和教育を変えていくとした運動についてどういう評価をしていましたか？

坂本　あのう、闘争について？　うーん、評価いうか……

まあ、どう言うたらいかな。いろいろ見方があったみたいですけど、それからのことがね、大変でしたから。それ以降、自治会と話し合ったりもしましたし。みんなそれぞれ教室のなかでも、やっぱりしんどかったから、そういうことで頭が一杯だった。自治会が解放研の運動反対のピラを盛んに出してくるし、だからあまり闘争のことについてどうのこうのと（評価する）いうことはなかつたですね。あのころが（闘争の）前よりもえらかつたんと違うかなあ、毎日、ピラを夜中までかかつて、朝四時ごろまた起きてと。

——自治会のピラの内容というのは、やっぱり『赤旗』がずつと書きたててるような「暴力事件」云々ということだったんですか。

坂本 そうですね。「暴力集団丸尾……」とか、なんとかとか、そういうことばっかり書いたピラでした。

——それにたいして解放研の方はどういう主張をして、「暴力集団」云々のキャンペーンに反論していったんやろうね。

坂本 やっぱりあの場合ね、どうすることができたのかという、そういうところから話し合っていた。また、いままでどういう同和教育がされてきたかとか、そういう話をして、やっぱり向こうは「暴力」しか言ってこ

ないし。でも、話し合いするにしがたがって、自治会のなかでも……自治会いうても、社研とか部落研とかの集まりみたいなもんだけど、「あの場合、みんながワァツとなつてゐる時にね、怪我をしたとかそういう人が両方にいるんだし、で、ハリストをしてるのに先生が帰っちゃいう時に、親とか支援する人たちがほかにどうすることができたんだ」というと、「やっぱりああるより仕方がなかつただろう」という意見が向こうから出ましたから。話し合いするにしがたがって、ひとつは進歩したかなあという感じがありますね。

——それは自治会のメンバーだけ？ その他の生徒もそうでしたか。

坂本 その他の生徒はどうだか分からない。まあ、自治会と話し合おうということでも何回か話し合いを持ったり、教室のなかでは、それぞれが「同和教育」の時間なりにやっていくということでしたんですけど。

——それは二年生になって、（昭和）五十年いっぱいぐらい続いたわけですか。三年生になつても、そういうピラを出したりとかやりましたか。

坂本 三年生になつてからもピラは出しましたけども、やっぱり（回数が）少なくなりました。メンバーも八鹿高校に来る（部落の）生徒が少なくなつたんで、次第に



福連事件被告の激励会(1928年)

減っていったし。わたしと同じ年の生徒は多かったです。
す。

—— あなたのあとから入学してきた生徒で解放研に入つた生徒はかなり少なかったんですか。

坂本 そうですね。わたしより一つ(年)下の生徒はわりといました。一つ下というと、解放運動が盛んになって、確認会とか糾弾会が盛んに行われるようになった時に、中学三年で(中学の)解放研を作った人らだったから、わりとみんながんばってやってきました。そのもう一つ下の学年は本当に少なかったですね。いなかったのと違うかなあ。もう部落の生徒自体が少なかったんだと思います、あの時は。

—— 解放研はどれくらいピラを出したんやろうね。

坂本 相当出したんです。あのう、「自信と展望」だったわけ。「自信と展望」という題で、何号まで出したか忘れたけど、ほとんど毎日出していた時があったし、まだピラはたくさん残つてると思いますけど。

聞き書きメモ

① 今回の聞き書きの話し手になった坂本真由美さんは

兵庫県養父郡養父町の被差別部落に生まれた。一九七四（昭和四十九）年四月八鹿高校に入学したのち、同年の秋に結成されたばかりの解放研に参加した。八鹿高校差別教育糾弾闘争のおり、二十数名いたメンバーの多くは卒業後、京阪神地方の大学や企業などに入るために南但馬をはなれて行った。坂本さんは京都の女子大学を卒業したあと、ふたたび南但馬に帰った数少ない元解放研究生徒の一人だった。

② 坂本さんからの聞きとりは一九八一（昭和五十六）年十月二十四日の夜に二時間半ほどにわたって、坂本さんの自宅応接室で行った。そのさいにテーブルにおさめた話のほぼ全部をまとめたものである。八鹿高校で部落解放に立ち向かう同和教育を要求するとともに、部落の人間としてみんなの前で「自信と展望」を持って発言し、行動したいと願った解放研究生徒の思いを知ることができるよう感じた。その一方で、解放研究生徒の願いに耳を傾けようとししないで、「解同の尖兵」と見なして、真っ向からの敵対をくりかえした八鹿高校教師集団の政治的硬直性が暴露されているように思う。

（たみや たけし・社会学部教員）

日本中国

ことばの来往 ゆきま

その23

芝田 稔

消えていくことば―「五・七幹校」(3)

『紅樓夢』の研究で世界的に有名な、またそれ故に、最初から反右派闘争の激流に巻きこまれてしまい、ここ三十余年来消息を断っていた俞平伯先生(八六)が、去る一月二十日北京で正式に「平反」ピンファン、冤罪が晴れて無罪になること」されたという報道(一月二十三日、香港・大公報)があった。

俞平伯先生といっても、日本ではその筋の専門家以外には余り知られていないが、蘇州寒山寺で有名な唐張繼

の「楓橋夜泊」の詩碑を書いた清俞樾が、先生の祖父であるといえ「ああそうであるのか」と思われる御仁は少くないはずである。

私が俞先生を知ったのは北京大学一年次生の時、留学生必修の「国語」クオエイ、中国語」を華粹深講師について、朱自清や俞平伯の文章を学んでからのことである。俞先生は、当時文化・教育界の大御所周作人先生から「北大教授」に就任するよう要請を受けていたそうだが、日中戦争最中のこと、伯夷叔齊の故事にも似て、自説を守りぬいた人であった。私はただ一度学友に誘われて崑曲研究の同好会で、先生のお話を聞いたことがあ

るだけだが、文章に見られる温雅、重厚で清浄な文風からお人柄の判る、印象深い中国文人のお一人である。

俞先生の『紅樓夢研究』がその研究方法について批判を受けたのは一九五四年一〇月のこと、李希凡・藍翎（二人とも当時山東大学助手）らの批判を受けて反右派闘争の対象とされて以来、不運な半生が待っていた。六六年六月「文化大革命」が発動されてからは、社会科学院中庭の清掃が日課であった。ことに林彪の発案になる、「五・七幹部学校」ができてから、その第一号命令で河南省の田舎へ送られていたという。

「五・七幹部校」とはどんな学校なのか。一口で言えば、知識分子を再教育する学校だが、農民の指導を受けるのだから全て肉体労働にこき使われる。劇作家の陳白塵教授（現在南京大学中文主任）は、ある「五・七幹部校」で三年余を送られたが、その間にした仕事は田植、種まき、麦刈、砂ふるい、煉瓦運び、土掘り、車引き、下肥汲み等二十余種類に上り、「魯迅の書いた阿Qよりもいろんな仕事ができるようになった」と笑っていたという。しかし一番長く就労されたのは「あひる飼い」で、六日もある竹さお一本を操って、一日中あひるの守をしていたのだった。

俞先生も同じ辛苦を嘗められたようだが、同じ幹部学

校で一緒に暮らした詩人荒蕪は、俞先生を評して次のように歌っている。

朝ニ読ミ夕ニ耕シ、夜麻ヲ績グ、

園ニ灌ギ、瓊ヲ抱キ、喜ビテ家ヲ安ンズ、

言フヲ休メヨ、老去、詩情滅スト、

只覚ユ、新来、飯量ノ加フルヲ。

まこと、陶潜の「菊ヲ東籬ノ下ニ採ル」の心境であったかに見受けられる。だがその間に夫人を亡くし、ご自身も七五年には中風になり、今は歩行もままならず、先の「平反」祝賀会であった「俞平伯先生学術工作六十五周年紀念会」にも外孫を代人に立てたのであった。

「五・七幹部校」にまつわるエピソードは数々あるが、概ね悲惨で暗いものが多い。だからこそそれに関わることばとして「牛欄、牛棚」宿舎のことを指す牛小屋「下放下郷」思想改造目的のため農山村へ行くこと「無産階級專政」「群衆專政」等が連動してくるのだが、最後に明るいエピソードを一つ。（「隨筆」より）

「小五・七」というグループもあった。これは知識青年で下放したものを指すが、ここでの知識青年とは都会で中等教育を終えた青年を指す。彼らの学校は「広大なる天地」であり、ここで学ぶのは「地球をけずる」ことだけであった。だから数年も再教育を受けていると、すつ

かり粗野な人間になり、家に送る手紙も当字だらけとなる。揚句には農民からも文句が出て、転職させるほかなくなったのであるが、手づるがあり裏口の効く者は、都会の工場へ、或は推薦されて大学生となつて出て行つた。

あるAという若者、全く手づるがなく、錢もない。最後まで残された彼は一計を案じた。人民公社に対し身分報告を忘れた旨を申し出て、加筆を許されたのであるが、公社書記はその調査表見て驚き「どうして、最初から記入しなかつたのか」と訊すと、A君は「私の叔父さんは、君が再教育を受けに行くのだから、私の名前を書いてはいけない、といわれましたので」と答えてうつつむいた。

公社書記が驚いたのは、A君の叔父という人は省委員会書記であつたからだ。早速会議を開いて優先的にA君の就職を決めた。それは省最大の工場の宣伝科であつた。A君は預期以上の成功に大喜びで、一生懸命に働いた。その翌年省書記がこの工場を視察することになると、工場の党書記はA君を接待係に指名した。A君は極力断つたけれど聞き入れられず、当日を迎えた。A君はできるだけ人の後に回り、かくれるようにしていたが、食事の時に遂にウソが露頭しそうになつたのである。

工場書記：あなたの甥御さんが当工場に来て一年に
なりますが、態度が立派で近く入党してもらいます。

省書記：えーっ？ 私の甥ですか？

工場書記：ハイ、そうです。あそこにいる…（といつて指すと）

省書記：（A君をじつと見つめていたが）君は…。

A君はもうこれまで、と観念したが、サツと立上ると銚子を持つて省書記のところへ進み出て「叔父さま、どうぞ一杯」と酌をしながら、耳下でひそひそ。省書記は席を立ててA君を角に連れて行く。

A君：私には秘密があるのです。あなたに打明けませんが、他人にもらさないで下さい。

省書記：（秘密ということばに特に興味をもつていたので）いつてみな。

A君：怒らないで下さい。私はあなたと同郷です。「五・七」で五年間働きましたがコネのない者は出て行けません。ふとあなたの名を思い出しました。五百年前にはおそらく一族だつたろう、と思ひまして、あなたを叔父さんに仕立てました。それだけです。どうぞご処分を！

省書記：とんでもない／＼なかなか…、役人になるツボを心得ておるわい。よし、認めてやろう。（といつてドンと、A君の肩を叩いた）

そして席に戻るとなみなみの酒盃を一ぺんに乾すと、

「私の甥がこんなに早く拔擢されているが、今後は気使いのないように。幹部は特権をふり回してはならんからな、ハハハ……」

「五・七幹校」という名称は、毛沢東が一九六六年五月七日、林彪宛の手紙で述べた指示に従ってこさえた開墾作業場。それが文革の高潮と共に思想改造の幹部学校に仕立たものであるが元を正せば延安時代の「抗日軍政大学」にまで遡る。校長林彪、副校長羅瑞卿の下に全国から集った学生数百名が一糸乱れぬ軍隊生活を営みながら荒地を開墾し、自活自立、集団学習をつづけたものである。毛沢東や朱徳、周恩來らも講師となり、大空の下、谷間の凹地を教場に、学生たちは膝小僧を机代りにして勉強に励んだ。そして軍政両面の優秀な中堅幹部を養成したのであった。文革中にこの成果を期待してこさえたのが「五・七幹校」なのであるが、その期待とは裏腹の結果を招くことになり、文革の失敗とともに、今は悪夢の材料を提供するに止まっている。

漢字はどうなるのか

「中国文字改革委員会」が「国家語言文字工作委员会」(以下「国家語委」と略称す)と改称されたのは昨年十二月

十六日のことであり、新年早々の六日から十三日まで、北京で全国規模の第二回の文字改革会議が開催された。この会議は正式には「全国語言文字工作会議」といわれ、その中心議題は一九七七年に公布されて以来懸案になっている「第二次漢字簡化方案(草案)」(以下「第二次案」と略称す)に決着をつけることであった。結論から先に述べることにしよう。十三日の閉会時に陳章太国家語委副主任は総括報告を行い、漢字の簡略化について次のように説明した。

「第二次案」には両方の意見がある。公布賛成派はこの案はすでに人民大衆の中で使用されており、一定の社会的基礎ができていと主張する。反対派は、同案の試用を停止するよう早急に正式に布告せよと主張する。その理由は出版物特に字典、詞典、百科全書、叢書等の印刷やコンピューターの漢字に支障を起すこと、また東南アジア各国に影響を及ぼすことが憂慮されるからだとする。そこで会議は中央機関に対して、早急に決断を下すよう要請する。

これは会議が「第二次案」の公布賛成か反対かの二者択一を中央機関に一任したことになるが、ことばのニュアンスからいえば「第二次案」は御蔵になったも同然である。

というのは、この発表があつてから間もなく「マレーシア漢字簡化委員会」の曾永森主席が談話を発表し、「第二次案」の公布反対派を支持したからである。

大会が第二次案の使用停止を提議したことに對し、われわれは大いに賛成する。当委員会が制定した略字総表は、中国の第一次案に基づいて編纂したもので、この略字は中国や他の国でも引きつづき使用するようになるが、マレーシアも例外ではない。

また同委員会では、「第二次案」はいささか略筆に過ぎ、漢字の美感を失し、現実生活の要求に適應できない。中国の専門家たちがこの略字を採用することを放棄したことは大へん喜ばしいことである、と結んでいる。

では御蔵になる「第二次案」とは？ 簡単に説明しておこう。これが発表されたのは一九七七年一月二〇日であつたから、八年余り前のことである。第一表二四八字、第二表二六九字で、このうち第一表の略字が、発表の翌日から、党機関紙「人民日報」で使用されるなど、その意気込みはたいへんなものであつた。七八年一月からは党中央機関誌「紅旗」をはじめ他の全国紙も一斉に新略字を採用しはじめた。と同時にまたその賛否両論が鋭く対立し、その結果活字印刷の試用は四月末日を以て打ち切りとし、五月一日以降はまた元の第一次案の活字





に戻り、以来、今日まで八年間変化がないのである。

具体的にはなお判明しないが、先日の全国会議では、その後研究を重ねて得た一一〇字に絞って、公布する可否かについての激論があったことは、想像に難くない。

ところで「第二次案」が出た時、一見目を疑うような漢字群に心を引かれて、パズルを解く面白さにも似た感を抱いたものであった。

同音代替文字では「泰」という字に代って「太」「蛋」に代って「且」「舞」に代って「午」が正字になるので、「午会」ダンスパーティー「午女」ダンスー」ということになる。

形声文字では「酒」という字は「さんずいへん」に、「九」。「感」は「干」の下に「心」。同様に「意」は「乙」の下に「心」と書く。「儒」は「にんべん」に「入」と書くのだが、これらの漢字は中国語音を基礎にしているので、中国人には理解しやすいが、外国人にはどうもいっただころだ。

会意文字では、手紙という意味の「信」を「にんべん」に「文」と書く。「家」は「うかんむり」に「人」。「寡」は「一」の下に「人」という字をくつつける。これとは逆に「一」の字の上に「人」を書いて「集」。「燃」は、「一」の字上に「火」など、会意文字としての理屈には合



うが、美感を損うこと甚だしい。

部分省略文字では、思い切りがよいのに「雪」がある。つまり「雨」を取り除いた「ヨ」が「雪」という字になるのだ。「病」という字も「丙」を取り去って「やまいだれ」だけ。「宣」も「うかんむり」の下に「一」を引くだけ。「徳」は「一」の下に「心」を書けばよいというのである。このように奇抜な漢字群の中で、日本の現行略字を見付けた時には、何故かホツとした。異郷で友人と出会ったような嬉しさでもあった。とはいえ、それは、年令の「令」ただ一字だけであった。

「第二次案」は合計五二七の略字を発表して、その試用をすすめたのであるが、前述のとおり活字印刷の面では取り止めたものの、筆写の場合は別に制限をしなかった。したがってこの八年間に相当浸透したものとみられる。お互い同士の手紙のやりとりには当然のこと、大学の掲示板に出る「海報」ハイバオ、張出しのことや「菜單」ツアイタン、献立表」には判じ読みしなければならぬような漢字に出会すことしばしばである。現在社会に流通しているこれらの新略字は、凡そ百十字とされているが、見方によっては、先の会議で宣言したように「当面社会で起っている漢字使用の混乱現象は可成り重大である」ので「有力な措置を講じて是正すべきだ」と決意し

組織部員募集!!



組織部員を募集しています

生協新聞・書評誌の編集発行、講演会・映画の開催など、文化・教育活動を自らの手で作り上げてみませんか。

●連絡先 生協本館3F・組織部内

☎38719998 (直通)

☎38811121 (内線4821)

たようである。

このことは、漢字をいじくるのに、むやみに先走るところを止め、已に三〇年来使用して来た「第一次方案」の一本に絞り、じっくりと打ち固めて、昨今また新たに発生生しつつある文盲の退治と義務教育の土台固めに取組む決意を示したものとして注目されるのである。

(しばた みのる・文学部中国文学科教員)

華やかな仮装の陰で

山村嘉己

1

ヴェルレーヌの第二詩集は「雅宴」(一八六九年七月刊行)である。この *Fêtes galantes* というのはルイ王朝の貴族たちがしばしば庭園で行った野外の宴を指すので、もともとは農民のものであったのを、貴族たちがその牧歌的情緒を生かして自分たちのものにしたらしい。美しく整えられた庭園で、牧歌の主人公やイタリヤ喜劇の人物の仮装をして、たのしく踊りかつ飲食をしていたようだ。十八世紀の画家ワットーやフラゴナール、ランクレなどが好んで描いた画材の一つで、第三帝政期のフラン

スでは、とくにこのロココ風の画家たちが愛されていたこともあって、ヴェルレーヌは「土星びとの歌」で展開したかれ独自の世界を、この画家たちの絵を借りて表出しようとしたと言えることができる。

君の魂は選りぬきのひとつの景色　そこに
マスクやベルガマスクの人々　竖琴をひきつつ
踊りさんざめき　魅惑たつぷり行きかうが
眼をひく仮装の下でも心はほんのりと苦い。

恋の勝利と　人生の悦楽を



ワットー「田園のたのしみ」

歌いあげはするが 短調の嘆き節で
かれらにはその幸福を信じる様子もなく

折から かれらの歌声は月光にとけて行く。

哀しくも美しい 静かな月光にとけて行く

木の間に眠る鳥たちを夢に誘い

大理石の水盤に ほっそりと立つ噴水を

その大きな噴水を恍惚にすすり泣かせせる月光に。

これが冒頭の「月光」(フォーレがこれに作曲をしている)であり、一八六七年二月、ルメール書店の「詩誌」に発表されたが、これと同時にそこに掲載されたのは詩集では十五番目に入る「マンドリン」である。

セレナードを歌う男たち

耳を傾ける美しい女たち

歌うような小枝の下を

行きかう色あせた口舌の数々。

これはチルシス あれはアマント

またこれは 永久にかわらぬクリタンドル

それからダミス 女はみんなつれないのに

いくつもやさしい便りを送る。

男たちの短かい絹のヴェストも
女たちの長い裾ひくドレスも

Mandoline

Les donneurs de sérénades
Et les belles écouteuses
Échangent des propos fades
Sous les ramures chanteuses.

C'est Tircis et c'est Aminte,
Et c'est l'éternel Clitandre,
Et c'est Damis qui pour mainte
Cruelle fait maint vers rendre.

Leurs courtes vestes de soie,
Leurs longues robes à queues,
Leur élégance, leur joie
Et leurs molles ombres bleues

Tourbillonnent dans l'extase
D'une lune rose et grise.
Et la mandoline jase
Parmi les frissons de brise.



「マンドリン」

優雅な身のこなし 歎びの仕ぐさも
そしてやわらかい青い影も

みんなバラ色の かすんだ月の光の中で
ただうっとりとするくる廻り

そよ風のさざめきわたるなか

マンドリン 颯々^{じつじつ}とむせび泣く。

これら二つの詩はまさに『雅宴』の姿をそのまま象徴的に写し出している。ここに展開されるのはワットーの幻想的な雰囲気のを題材にして無限に広がる詩人の追想であり、その追想にまじえて訴え出される深い自我の憂愁である。『土星びとの歌』の中ですでに展開されていた『漠然とした悲哀感』は、ワットーの仮面の陰にその夢のような感覚を残りなく表現することができ、イタリヤ喜劇の快活で粋な舞台の上で、ヴェルレーヌの傷ついた痛ましい自我はさりげなくその痛苦を告白しえたのであった。

すでにふれたように、十八世紀のロココ的世界への愛着は十九世紀の中頃、とくに第二帝政期のフランスにおいて顕著であった。ゴンクール兄弟の『十八世紀の芸術』(一八五九よりダンテユ書店)がこの風潮に決定的な

影響を与えたことは有名であり、ヴェルレーヌもその例外ではなかった。かれからこの書物を贈られ、ルーヴルにも訪れたこともある友人ルベルシエがはつきりと傍証している。そしてロビシエがガルニエ版全集の紹介で示すように、かれに先立って圧倒的なほどの先人が同じ主題を扱っている（グラティニ、パンヴィル、ゴーチエ、ミヨッセ、ネルヴァル、とくにユゴーなど）。さらにここにもボードレルの姿は拭いがたく浮び上ってくる。ワットーの『シテールへの旅立ち』は二人に同じく詩想の源を与えた。しかしつきにかかげるヴェルレーヌの「シテール」の、いかにもつつましく、内気なことか。

すかし格子のあずまやが
そととぼくたちの歎びを隠してくれる
親しいバラの小枝に風は薫る

過ぎて行くそこはかかない夏風にのり
あえかなバラの薫りは匂いたち
あの人の残り香にまじり合う

その目があんなに示していたように
あの人の大胆なこと 唇をすえば

えもいわれぬ熱つぼさの溢れかえること

ところで〈愛〉がどんなに溢れても

〈空腹〉だけは思案の外 ソルベとお菓子で
ぼくたちの恋の疲れはいやされる

最後に些かの皮肉の香辛料がきいてはいても、そこに
〈おのれの姿のぶら下る象徴の絞首台〉を見、〈嫌悪なく
おのれの心と肉体とを見つめる力と勇気を与えよ〉と神
に祈ったボードレルの壮大な『シテールへの旅』の痛
烈な自己凝視の片鱗すら見出すことはできない。

〈それはもはやボードレルの忘れがたい扉によって開
かれた無限の地平線ではなかった。それは月光の下、は
るかに限られた、はるかに内密な世界の上にかすかに開
いた裂け目でしかなかった〉というユイスマンズの評は
この違いをまさに適確に言いあてている。

2

しかし、すでに何度も述べたように、いかに高踏派的
な非個性の世界に身を置いているごとく見えても、ヴェ
ルレーヌの心はつねに神経的に弱々しく震え、人知れぬ
悲しみに深く傷ついていたことを忘れてはならない。こ



「ニーナのサロン」

の頃（つまり、一八六七―九年）のヴェルレーヌが情熱の音楽家ニーナ・ド・カリヤス（またはヴァイヤール）のサロンに足しげく出没し、飲酒の悪癖に溺れたことの意味を重視したクロード・キユエノはポケット版『土星

びとの歌、付雅宴』の解説で、この時、ヴェルレーヌはいとこエリザとの絶縁に深く傷ついていたと説明している。『土星びとの歌』の「二度とふたたび」にその二があったことを忘れてはいけない（その一はすでに前回に訳出しているが、エリザとのたのしい恋の思い出をうたっていた）、とかれは言う。

幸福しあわせがぼくと肩を並べて歩いていて、

ところが《運命またま》はけっして容赦しなかった。

果実には虫がひそみ 夢には目ざめがある

そして 恋には悔恨がつきものなのさ

恋はいつだって消えて行くものだ。この苦い想いがヴェルレーヌの心を去ったことは一度もない。しかし、かれにとつて、言葉の純粹な意味で《愛する人》であり、姉であり、あるいは少しばかり母とも言えたエリザの心変りは何にも勝って悲劇的ではなかっただろうか。1のところを示した「月の光」は、まさに完璧の芸術品だが、それは《死ぬほどに魂に傷を負った詩人の審美的な恍惚》だと断定するキユエノは、『雅宴』は死んで行こうとする、あるいは死んでしまった愛の悲劇であり、それもまた阿片にすぎない審美的な恍惚への狂おしい逃避、美の

人工楽園への避難である—まるで美が女性の愛に変わりうるものだと言わんばかりだ」と分析している。

これはあまりにもうがちすぎた解釈だと言えないことはない。しかし、ニーナのサロンで、シャルル・クロス、レオン・ディエール、ヴィリエ・ド・リラダン、その他コペ、フランスなどのすばらしい友人を得たという事実もあり、そこにかれを伴ったのが、後の妻マチルド・モリーテをかれに紹介するシャルル・ド・シヴリーだったという機縁があったとしても、この頃のかれの生活の破綻は異常であつて、ここにキユエノのような推論が出てもけつして不思議ではない。前回指摘したヴェルレーヌの醜さがここでも大きな役割を果していることもまた否めない事実であろう。たとえばアントワーヌ・アダンはその著『貞実のヴェルレーヌ』の中で、ランドリ塾に入つた頃(九才)のかれの姿を描写し、そこでマスターヴェーシヨンの悪習を覚えたことなどにふれながら、それまで両親によって隠されてきたかれの醜さがここできいかに強調されたかを説明して次のように書いている。

「かれの醜さは驚くべきほどであり、例外的なものであつた。かれの顔色は蒼く、ほとんど土色で、はり出した大きなおでこ、深く落ち込んだ目、頬ぼねは突き出し、鼻は低い。モンゴル人の顔、調子の悪い日などはほとんど

死人のような顔」(同書二四ページ)

その他、ヴェルレーヌに対する教師の評によると、「服装がだらしなく、身体も被服も学校で一番汚いし、頭の悪い犯罪人を思わせる醜い顔」などと酷評されている。

これは親友ルベルシエまでが、自分の母がヴェルレーヌを《動物園から逃げて来たオランウータンの感じ》と言つたと紹介しているのであるから、けつして誇張ではないのであろう。しかも、同じアダンの指摘するところによると、ヴェルレーヌはすでに十七才のとき、「女」がぼくから離れなかつた、というよりはぼくの夢から離れず、夢に誘つた」と書いていたというのだから(同書二六ページ)かれの内部におけるコンプレックスは想像に



ヴェルレーヌ (匿名のクロッキー)

絶するのではなからうか。母とも慕うエリザの中にすら
かれに對する女としての嫌悪感が目ざめていたと知るこ
とは、そのかの女の現実の死よりももつと厳しく切ない
体験であつたと言わねばなるまい。地に墮ちた「愛の神」
を讀んでみよう。

昨夜の風がキュピッドを地面に倒しちまつた
公園のとりわけて影の濃いあたり

いたづらっぽく弓ひきしぼり 笑いかけ

日がな一日 ぼくたちの夢をかきたててくれた

あのキュピッドを 昨夜の風が地面に倒しちまつた
その石片が朝風に散つて くるくる舞っている
悲しいことに 台座だけが残つて 暗い木の間では
作つた人の名前もはつきり見えない

ああ 悲しいことに 台座だけが立っている

ひとりぼっちでノ 見ているぼくの胸には
せつない思いが行き来する 深い苦しみに
浮かんでくるのは 淋しく救いようのない未来ばかり

ああ 何て悲しいことだノ 君だつて

こんな辛い絵を見れば 心の底も痛もうものを
たとえ浮気な君のひとみは 小道に折りしく破片の上に
金欄紅羽と舞う蝶に いくらひかれていようとも。

笑い流すふりをするしかない悲しみ、そんなふりをし
てもすぐ立ち帰る胸の痛み、まさに酒に逃れるしかない
地獄の運命だつたのだろう。

3

酒に紛らすしかない無間地獄とはいつたが、ヴェルレ
ーヌはさすがに「土星びと」であつた。すでにその出発
に凶運の星を自覚したかれは、苦惱にふるえる心の中で
つねにそこからの脱出を誘う詩神のささやきを消すこと
はなかつた。キュピッドの大理石の像の破片が散りしく
のを見た小道にあつても、かれの幻想は一方ではこんな
詩篇を生み出してみせる。

田園牧歌の昔のようにべつたりと白粉つけて
リボンをたつぷりと結んだ中で、かぼそげに
あの人は歩いて行く こんもりと繁る枝葉の下
緑の苔むすベンチの見える小道の中を、
いつもはかわいいおうむのためにとつておく

あのもろもろの身のこなし、もろもろの思わせぶり。

長く尾をひくドレスは青色、

大きな指輪のかぼそい指にあやつる扇

色気話にたのしく動き、とめどなく広がる話に

あの人は夢遊ばせつつも かすかに笑う、

—— つまるところは金髪の人。かわい鼻に

赤くぼつてりとした口、それでも無意識に

そなわる誇り高い上品さ、—その上 少しすがめの

目をひきたたせるあのつけぼくろよりももつと優しい

こうした世界の展開にはイタリヤ喜劇の人物はうって

つけだ。「パントマイム」「草の上」はこの系列となる。

ピエロはクリタンドルなどと似もつかず

もう待てないと酒びん一本空かにして

ただもうやたらに パテにかじりつく

カサンドルは道のかなたで

人知れず涙をそそぐ

勘当された甥の身の上に 人知れず

この性悪男のアルルカン 手だてをつくす

コロンビーヌをかどわかそうと

あげくのはては くるくる身をひねる

コロンビーヌは夢の中、そしてびっくり

風の中にも心があつて、

自分の心に恋のささやきがあろうとは。

(パントマイム)

(ピエロはイタリヤ喜劇のペドロリーノのフランス名、クリタンドルはフランスの古い喜劇の悪人役、カサンドルはイタリヤ喜劇の老人役でピエロやアルルカンなどに手玉にとられる間抜けな人物。アルルカンとはイタリヤではアルレッキーノ、黒い顔、グレーの帽子、派手な雑色の服を着ている。女好きだが気は弱い。コロービーヌはびちびちした小間使いで、カサンドルの娘であったり、パンタロンの娘であったり、またかれらに言い寄られたりすることもある。この詩の解釈にはこれだけの知識は必要であろう。もつとも当時は流行中のこともあつて、こんなことは常識だった。)

「草の上」はもつと砕けた形を持っている。候爵と司祭と二、三の羊飼いの女たちとの会話から成っている。

— 神さま 口が廻っておりません— いやいやや貴方
候爵さま、かつらが曲っておりますぞ、

— このシープルの古酒の何ともいえぬ味

それでも カマルゴさま あなたの首筋とは比較に

ならぬ

— わしの燃ゆる思い：— ド、ミ、ソ、ラ、シ。

— 神父さま 貴方のたくらみは見え見えですぞ

— 女性方よ、わしはいっそ死んでしまいたい

もしもそなたたちに星をとつてあげられないならば。

— わたしは小犬になりたいものだ、

— わしらの女子たちを抱いてみたいぞ

つぎつぎと — ああ 殿方たち どうしました

— ド、ミ、ソ — おや 今晚は お月さま

(この詩には別の原稿が見つかつて、これが一種の劇的構成であることが分つたから筋がほぐれたが、それぞれの台白がだれのものか、一見しては分らない。そこどころが一つのしやれなのだろうか)

このようなヴェルレーヌの戯れにいつまでもつき合っ

て行くことはあまり快いことではない。すでに紹介した
軽妙な「マンドリン」のすぐ後にほろ苦い「クリメーヌ
に」を置かざるを得ないヴェルレーヌの心を思いやつて、
その痛手にもかわらず自ら死を選ぶことはけつしてし
なかつたかれには、まったくシヨールペンハウエル風の女
性嫌悪があつたのではないかと疑うのは先にもあげたキ
ユエノである。事実、ランボーやリュシヤン・レチアノ
との男色関係は隠れもない事実であり、ヴェルレーヌは
根本的に女性に溺れこむことはなかつたのかも知れない。
あるいはアダンの持摘するように母への特殊な意識から、
女性への思いを根底的におしまげられたのかも知れない
(「ボードレルの母のような裏切り行為はなく、マチルド
との問題のときもむしろ徹底的にヴェルレーヌの味方だ
つた母。しかし、アダンも言うようにかれの醜さが実は
母親似から生じていることなどを思うと、後に泥酔のは
てとはいえ、母を絞殺しようとして罰せられたかれの深
い心奥には複雑なマザー・コンプレックスがあつたと考
えざるを得ない)。

《実際のところ、ヴェルレーヌはニーナの家で、あるい
はかれの《気晴らし》のなかで何を見出しえたのである
うか。心を持たぬ人形たちか、それとも冷たい拒絶なの
か。そうだ、それは《悪魔の狂宴、宴》だつたのだ—そ



ワットー「完璧な和音」

のこだまが遠く『雅宴』のなかにひびいている。しかし半ば狂人の主催する宴会のなかでは、ましてやサバトのなかなどでは、だれが心から愛する女性を見出すことができようか。

これこそが『雅宴』の持つパラドックスだ。リズムは高踏派風だが、深奥の詩想はそうではない。ゴーチエ風の、パンヴィル風の軽妙なこれら詩篇には、この旋回する仮装舞踏会には、疑いもなく、その隠れもない幻影にもかかわらず、慎重にカモフラージュされた秘密のドラマが潜んでいる。いずれにしてもこれはまさにヴェルレーヌのもっとも完璧な、いやもっとも精妙なとも言えるような詩集である。だれもこれに飽きることはあるまい。キユエノはこのように結論している。この詩集の最後を飾る「感傷的な会話」によってこの稿も閉じておこう。

人気がなく凍りつく廃園のなかを
今しがた 二つの影が通り過ぎた

その目は死んだよう で 唇はゆるみ
その言葉も ほとんど聞きとれない

人気がなく凍りつく廃園のなかで
二つの亡霊が 過去を呼び返した

— 過ぎた日のあの恍惚を覚えているかい
— どうしてわたしが思い出さなきゃいけないの

— ぼくの名前を聞くだけで 君の心は今も踊るかい
夢にぼくの魂があらわれるかい — いいえ いいえ

— ああ ぼくたちが接吻を交し合った

口にはつくせぬ幸福の美しい日々よ — そうかも知れない
— あんなに青かった空 希望もはてしなかった

— 希望なんて打ちのめされ 暗い空へと消えてしまった。

このように二人は 燕麦茂るなかを歩いて行った
夜だけが 二人の言葉を聞いたのだった。

(やまむら よしみ・文学部仏文科教員)

お知らせ

投稿募集

最近読んだ本の書評・内容紹介・批判等の作業を通じて自己の主張を述べたもの、現状分析、研究成果の発表・論文・エッセイも結構です。詳細は、生協本部3F書評編集委員会までお問い合わせ下さい。

投稿規定

▼原稿は原則として縦書き、一行二五字、二二行（五〇〇字）を一枚と計算。但し短評は、一行二〇字、二〇行（四〇〇字）を一枚とし、五枚以内。
▼枚数は自由（但し編集上の都合で何回から分けて掲載することもあります）。

▼締め切りは各月末日。

▼送り先 〒565 吹田市千里山東3-10-1

関西大学生協同組合「書評」編集委員会

☎(06)388-1121（内線4821）

(06)387-9998（直通）

▼原稿には住所・氏名・学籍番号・電話番号を記入のこと。

▼原稿は返却しません。必要な場合はコピーを。

編集後記

書評第七七号をおとどけします。
今回は新入生歓迎号として、読書案内の特集を書評編集委員会から新入生の皆さんにお送りします。

皆さんは「読書」と聞いてどのような印象を持たれますか？ これまでどのような読書をされてきたでしょうか？ 受験にでる評論文や小説ばかり読んだ人や受験のために読解力をつける目的で読んだ人が大半ではなかったでしょうか。しかし、大学に入ってから読書というのは、自分の選んだ専門分野に関しては先生や先輩から指導を受けなければならぬと思いますが、他は何を読んでも良いはずで、まさしく本能に任せて本を読みあさることも可能となってくるでしょう。確かに、今までと比較すると自分のために使える時間は多くあります。本書の読書案内も、そのための一つの指針として読んでいただければと思います。

■おわび■

先号から連載の池田浩士先生「小説のなかの異境―ロマン主義文学論序説―」は、先生が急病のため、休載させていただきます。申し訳ありません。次号には、体の完治された先生の作品をお読みいただけるかと思っております。ご期待下さい。

1986年4月号 通巻77号

編集・発行 関西大学生協同組合・組織部「書評」編集委員会

連絡先 吹田市千里山東3-10-1 (☎388-1121 〈内線 4821〉 or 387-9998)

頒 価 250円